

## 第1章

# 障害者スポーツ選手のキャリア調査

本調査は2019年度から開始しており、選手一人ひとりの個人史ならびにスポーツキャリアに関わるインタビューを実施し、どのような環境、支援、他者との関わりの中でスポーツを始め、継続しているのかについて検討している。今年度は11名の選手に協力をいただき、オンラインもしくは対面で、それぞれ1時間から1時間半程度のインタビューを実施した。なお、事前に調査目的、個人情報管理、調査の任意参加、調査協力を中止しても不利益が生じないこと等を説明し、同意を得た上で調査を実施した。協力者は、男性5名、女性6名で、先天性障害5名、中途障害6名、年齢は23歳～60歳(平均37.9歳)であった。主な質問項目は、個人的属性、競技歴、障害発生からスポーツ開始までの経緯、障害受傷前のスポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響、障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境、障害者スポーツ継続に関する状況、スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境、今後のスポーツ実施意向等である。

なお、本調査は日本福祉大学「人を対象とする研究」に関する倫理審査委員会の承認(申請番号18-11および22-001-01)を受けて実施した。また、調査にあたっては、本プロジェクトメンバーのほか、日本福祉大学スポーツ科学部の兒玉友准教授の協力を得た。

まず、調査対象者それぞれのスポーツ開始の局面に着目すると、これまでの調査報告と同様に普通学校における体育や運動部活動参加の困難性が垣間見られた。「本心ではスポーツに対して憧れをもっており、取り組みたいと思っていたが、『自分には無理』と思っていた。」「障害者がスポーツをするという概念がなかった」という語りが象徴的であるが、本来、運動・スポーツ経験の端緒となるはずの学校での取り組みが、期せずしてその後のスポーツ活動の「障壁」となってしまう事例が散見された。特に普通学校に通学していた重度障害のある人々においては、特別支援学校に進学、もしくは転校後にスポーツと出会ったというケースが見られ、普通学校と「障害者スポーツ」に関わる諸活動をいかに連携していくことができるかが重要であると言えよう。このような状況は、先天性障害のある選手のみならず、中途障害のある選手においても同様の傾向が見られた。普通学校在学中に「(病気が進行したため)車いすになってからは見学が多かった。」「(足を)切断してから学校の体育は～(中略)見学がほとんどだった。」という言葉にみられるように、障害の受傷によって、学齢期の継続的な運動・スポーツ実施が困難になる可能性も示唆された。

また、これまでと同様に、病院やリハビリテーションセンター等の医療職や、同様の障害のある「ロールモデル」の存在が、スポーツ開始・継続それぞれの局面で重要な役割を果たしているが、これらは「学校外」の機関、個人の働きかけによるものであり、前述のように幼少期から障害のある人々にとっては、「学校」での体育・スポーツとの出会い、支援者・指導者との出会

いも非常に重要であると言えるのではないだろうか。

さらに、今年度調査において特徴的なのは、競技継続の局面において、多くの調査対象者が都道府県や都道府県協会からの助成を受けている点である。これまでも、東京パラリンピック開催決定後、アスリート雇用制度の拡大や競技団体のパラリンピアンに対する支援が拡充されてきた旨の報告をしてきたが、全国障害者スポーツ大会や国内大会への出場を目標とする、もしくはこれから国際大会を目指していく選手に対しても助成金が支給されているなど、都道府県ごとの支援体制が拡充されている状況が示唆された。また、アスリート雇用ではなく、一般雇用でこれらの助成を受けて競技を継続している選手が複数名いることから、このような自治体の支援は単なる競技力向上のみならず、スポーツ参加の裾野を広げていくための重要な制度と言えるのではないだろうか。また、複数の調査対象者が、自治体の助成に関して「東京パラリンピック開催」の影響が大きかったと語っており、これらの地域レベルの支援がこれからも継続、拡大していくのか、あくまでも東京パラリンピック開催に向けた一過性のものとして縮小していくのかについては注目されるところである。本調査のみでは、都道府県ごとの具体的な支援内容や制度の詳細について詳述することはできないが、今後さらなる検討を進めていきたい。

(河西正博)

■図表1-1 キャリア調査インタビュー一覧

※1 一般雇用には障害者雇用を含む  
 ※2 パラスポーツ開始時の競技と現在の競技が違う場合は最初の競技開始時について記載

項目	22-A	22-B	22-C
調査年度	22	22	22
識別記号	40	41	42
生まれた年	1990	1991	1962
性別	女	女	女
居住地域	東海	東海	東海
調査時身分 ※1	選手雇用	一般雇用	その他
障害発生年齢	0	26	31
障害内容	視覚	肢体	視覚
障害程度	重度	中度	重度
学校種別	特支	普通	普通
現在実施競技	柔道	陸上競技	サウンドテーブルテニス
競技開始年齢 ※2	15	26	30代半ば
レベル	国際入賞	国際入賞	地域
パラスポーツ開始時の重要な他者 ※2	・高等部体育教師 ・盲学校教師(視覚障害の柔道家、柔道部の指導者)	同じ障害の女性選手二人、義足の陸上競技クラブのメンバー	・隣県のスポーツ指導員
パラスポーツ開始場所 ※2	・視覚特別支援学校(高等部)	・市の総合運動公園の陸上競技場	・地元の視覚障害者用図書館
パラスポーツ情報提供者 ※2	・弟	・リハビリ時の主治医	・視覚障害当事者のサークル活動をしている中で
パラスポーツ開始場所へのアクセス ※2	・本人	・両親 ・本人	-
パラスポーツ開始前のスポーツの影響	・ネガティブ	・ポジティブ	・なし
パラスポーツ継続時の重要な他者	・全日本視覚障害者柔道連盟に関わっている先生	・クラブのチームメイト	・特になし
パラスポーツ継続状況	・2013年専攻科卒業後、フリー(あん摩マッサージ指圧師)で柔道を続ける。その後アスリート雇用され、柔道に専念。 ・2大会続けてパラ出場を逃し、環境の変化が必要と思い2016年から4年間をS県の道場にて過ごした。 ・東京2020終了後、地元に戻り、アスリート雇用され現在に至る。	・現在、仕事の後、週に5~6日練習。 ・現在コーチの指導を受けず、自分で練習。 ・試合数は2022年度になって増加。神戸でパラ陸上の世界選手権があること、陸連とパラ陸連の連携が大きな要因。	・当初は、隣県のスポーツ指導員が月に1回指導に来てくれていた。その後、地元の大学卓球部の学生等と活動を継続。 ・2012年の全国障害者スポーツ大会に出場。 ・東海ブロック大会に毎年出場し、それ以外にも他府県で行われる交流大会にも参加。
支援	・勤務先	・公的機関	・なし
将来ビジョン	・競技を継続し、視覚障害者柔道の認知度を高めたい。 ・パラリンピック出場は通過点、生涯現役でいきたい。J1(全盲クラス)の指導者になりたい。	・直近の目標はパリパラリンピックに出ること。 ・競技は年齢が40代になるまで続けたい。 ・競技を通じて若い選手たちには情報提供したりしてサポートもしていきたい。	・可能な限りSTTTに関わっていきたい。 ・指導者が固りにくいので、自分がプレーをするだけでなく、指導もしている。 ・教えることも非常に楽しく、続けていきたい。
その他特記事項	・先天性の視覚障害者にとって、スポーツと出会う機会は限定的。数少ない機会とタイミングが合致した。 ・視覚障害者柔道は、IBSAクラス分けが変更となり、J1(全盲)とJ2(弱視)のクラスとなった。J1とJ2の違いを知った上でコーチングができる指導者、トレーニングパートナー等いければ競技継続にはプラスである。	・就職後は一般雇用のため練習時間が取れにくかった。コロナ禍により在宅勤務となり、時間の調整がしやすくなり練習にもじっくりと取り組めるようになった。 ・県からの助成金を受給しているが、海外遠征や義足ソケット部の改良等の経済的負担が大きい。	・サークルメンバーは高齢化し退会者が増加。一方で、新メンバーを探すことは難しい。弱視の人々の中には「見えていること」をやりたいと考える人もいる。 ・競技を通じていろいろな場所へ行き、いろいろな人と出会うことで世界が広がり、楽しい。

項目	22-D	22-E	22-F
調査年度	22	22	22
識別記号	43	44	45
生まれた年	1972	1977	1979
性別	男	女	男
居住地域	関東	東海	東海
調査時身分 ※1	選手雇用	一般雇用	一般雇用
障害発生年齢	12	5	19
障害内容	肢体	肢体	肢体
障害程度	中度	重度	重度
学校種別	普通	普通	普通
現在実施競技	車いすテニス	水泳	卓球
競技開始年齢 ※2	13	25	32
レベル	国際入賞	全国出場	国際入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者 ※2	・市のテニス協会の人たち	・職場を訪問に来た車いすユーザー(多様な情報を持っていた)	・部活動の生徒
パラスポーツ開始場所 ※2	・居住地近くの勤労福祉体育館	・車いすテニス:Y市の体育館	・勤務校の体育館
パラスポーツ情報提供者 ※2	・両親(車いすバスケ) ・市のテニス協会の人たち	・車いすテニス、セーリング:Nさん ・ダイビング:短大時代の友人 ・水泳:バリアフリーアワーセンター、県の障害者スポーツの関係者	
パラスポーツ開始場所へのアクセス ※2	・親(運転免許取得前) ・本人(運転免許取得後)	・本人	・本人
パラスポーツ開始前のスポーツの影響	・ポジティブ	・ポジティブ	・ポジティブ
パラスポーツ継続時の重要な他者	・日本人Mコーチ ・カナダ人Hコーチ ・ドイツ人Hトレーナー ・当時の職場の仲間 ・家族	・ダイビング:伊豆のインストラクター、ダイビング仲間(医療関係者や福祉関係者がいた)、奄美大島のダイビングクラブのスタッフ ・水泳:スイミングスクールのコーチ ・クリニック(アスリート外来)のドクター	・車いす卓球選手の先輩 ・通っている卓球クラブのコーチ
パラスポーツ継続状況	・大学4年時に国内トップになる。就職2年目にアトランタパラリンピックに出場。99年に転職し、選手雇用となり、競技に集中、2004年のパラリンピックを目標とした。 ・現在は午前中テニスのトレーニング、午後はテニスや、講演等をしている。	・パート半日(午後)勤務。午前中は自宅で家事をしたり、ヨガマットを使って筋力トレーニング。 ・水泳は現在、週に1回市のプールで練習。他の日は陸上での筋力トレーニングなどを実施。 ・ダイビングは奄美大島を拠点として継続。一人で移動、ダイビングクラブのスタッフ等に支えられている。	・大会等で、他の車いす選手に練習等の刺激を受ける。自らの行動で環境は変えられると考え、居住地の障害福祉課に連絡し、地域の一般の卓球クラブを紹介してもらった。 ・週1回、マンツーマンレッスンを受けるうちに結果が残せるようになってきた。
支援	・勤務先、スポンサー	・なし	・公的機関
将来ビジョン	・選手としてプレーは続けたい。 ・車いすテニスをやってみたい人へ、入り口の部分を支援したい。 ・パラ出場経験を活かして、パラリンピックを目指している人の支援もしたい。 ・大会運営、大会の立ち上げ。 ・コーチにも関心があり。(一般のテニス指導者の資格も取得。)	・2023年度に実施される鹿児島大会までは泳ごうと決めている。 ・ジャパンパラ水泳大会は自分の今のレベルでは難しいが、生涯スポーツの目標として頑張りたい。 ・ダイビングは旅行の一環で継続して楽しみたい。	・2024年のパリ、2028年のロサンゼルスへの出場を目指す。 ・2028年以降も家族や職場の理解が得られれば、可能な範囲で出場し、生涯スポーツとして続けたい。
その他特記事項	・中学入学前に脚を切断、その後、親からの紹介もあり、中学に入って車いすバスケに取り組む。その仲間たちと車いすテニスの講習を受けたことから、車いすテニスを始めた。 ・国際的にトップクラスになれたのは、地道なトレーニングや人々のサポート、自分自身の成長等によりステップアップしてきた結果と思う。	・水中は車いすに拘束されることもなく、自由に動けることに魅力を感じた。 ・体調や肩の調子が悪くなったこともあり、仕事を一旦やめ、腱板を手術。地元開催の全国障害者スポーツ大会に備えたが、コロナ禍により中止。気持ちの区切りをつけるために鹿児島大会までは頑張る。	・受傷後、勤務先の部活動指導をきっかけに受傷前に行っていた卓球を再開した。 ・障害を理解して受け入れてくれた地域の卓球クラブ、自ら車いすに乗り、パラ卓球の特性を理解して指導に当たった卓球クラブのコーチの存在が、大きな支えになった。

項目	22-G	22-H	22-I
調査年度	22	22	22
識別記号	46	47	48
生まれた年	1997	1990	1999
性別	女	男	男
居住地域	東海	東海	東海
調査時身分 ※1	その他	一般雇用	選手雇用
障害発生年齢	0	14	4
障害内容	肢体	視覚	肢体
障害程度	重度	重度	重度
学校種別	普通→特支	普通→特支	普通→特支
現在実施競技	ボッチャ	ゴールボール	ボッチャ
競技開始年齢 ※2	18	18	7
レベル	国際入賞	国際入賞	国際入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者 ※2	・練習見学をした際に輝いて見えたE選手など練習参観していた人、およびE選手の父、異動サポート等支援してくれる母親および情報提供してくれるPT	・学校の先輩と友人 ・盲学校ゴールボール部顧問教諭	・当事者団体の年上のお兄さんたち
パラスポーツ開始場所 ※2	・隣県の障害者スポーツセンター	・盲学校	・市の障害者スポーツセンター
パラスポーツ情報提供者 ※2	・PT	・盲学校の先輩	・県内のボッチャ協会
パラスポーツ開始場所へのアクセス ※2	・母		・両親
パラスポーツ開始前のスポーツの影響	・ポジティブ	・ポジティブ	・なし
パラスポーツ継続時の重要な他者	・複数のボッチャの県内選手 ・コーチ(上記選手の父) ・母親	・学生時代は部活動の顧問教諭 ・就職後は県の教育委員会のスポーツ課の方、特別支援学校の先生、元同じ職場の男性看護師、職場の方々	・家族 ・会社 ・コーチ
パラスポーツ継続状況	・入院中、県ボッチャ協会の練習会に参加したことがきっかけで退院後、県協会の練習会や選手の主催する練習会に参加。 ・翌年、県協会の合宿に参加。一人の女性選手と出会い代表の話や海外の話聞き、刺激され、ボッチャにはまった。 2016年にE選手が所属しているチームに入り、練習している。 ・今はボッチャが自分のすべて。	・2013年まではグランドソフトボールもプレー、その後ゴールボール1本に。 ・週3~4日練習、それ以外にウエイトトレーニング。職場近くの体育館、障害者専用体育館、盲学校等で練習。週末は代表合宿等に参加。 ・2019年まで日本代表候補、その後代表落ちし、東京パラには出場できなかった。	・県内にボッチャ協会があり、定期的に練習。 ・経済的に厳しいところがあるが、家族や日本協会からのお金、県からの強化選手補助金、「応援する会」からの援助、勤務先の援助などがあり、賄うことができています。
支援	・公的機関	・公的機関	・勤務先、公的機関
将来ビジョン	・現在、ボッチャのプレークラスが変わるかもしれないという状況なのでまず気持ちを整理して、自分に厳しくして日本選手権に出て代表選手になりたいと思っている。	・当面の目標は、パリパラリンピックに出場すること。 ・パリの先はあまり考えていないができれば長くプレーを続けたいと考えている。	・パリパラリンピックを目指す。そこで「金」をとりたい。個人戦でも頑張りたい。 ・パリの後のことまでは今は考えられない。
その他特記事項	・ボッチャ継続の内的動機づけとしては、自分自身で考え自分の体を使って主体的に参加できることのうれしさを試合で勝てないことの悔しさと、勝てるかもしれないという可能性を認識→自分の身体状況を自己研究・自己分析することによる可能性の見出しとパフォーマンスに対する向上心と支援者への恩返しと変化している。	・障害発生前のスポーツ経験(小学校で野球、中学校でバレーボール)が、同じボール球技であるグランドソフトボールやゴールボールにプラスに働いている。 ・2012年に地元開催の大会があり、就職の時はこの大会出場に配慮してくれるところを探し、現在の職場に就職した。	・小学2年時にボッチャ体験機会があり、面白いかもと興味を持つ。障害状況より、家族のサポートがなければ続けることはできなかった。 ・障害の進行から途中でクラスを変わらざるを得なかったが、ロールモデルとなる選手がいたことや、周りの支援のおかげでボッチャを継続するようになった。

項目	22-J	22-K
調査年度	22	22
識別記号	49	50
生まれた年	1982	1986
性別	男	女
居住地域	東海	関東
調査時身分 ※1	一般雇用	一般雇用
障害発生年齢	0	0
障害内容	肢体	肢体
障害程度	中度	重度
学校種別	普通	普通
現在実施競技	パラテコンドー	バドミントン
競技開始年齢 ※2	36	23
レベル	国際入賞	国際入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者 ※2	・道場の先生	・兄、医師、車いすバドミントンK氏
パラスポーツ開始場所 ※2	・地元のテコンドー道場	・都の障害者スポーツセンター
パラスポーツ情報提供者 ※2		・医師 ・障害者スポーツ指導員
パラスポーツ開始場所へのアクセス ※2	・本人	—
パラスポーツ開始前のスポーツの影響	・ネガティブ	・ポジティブ
パラスポーツ継続時の重要な他者	・道場の先生、理学療法士	・バドミントン仲間、地域のバドミントンコーチ、家族
パラスポーツ継続状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>・道場の先生の指導で、少しずつ上達。強化指定選手を目指す。全日本選手権で成績を残したい。</li> <li>・現在は、週に2回、2～3時間程度練習</li> <li>・今年度から強化指定選手。強化合宿が2・3か月に1度ある。国内大会は年に2回、国際大会は今年度3大会ほど出場予定。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・バドミントンが東京2020パラリンピックで正式競技に決定し、パラリンピック出場を目標に練習した。</li> <li>・2018年に転職し、アスリート雇用となる。午前中は勤務、午後はコーチ付きで練習を行う。</li> </ul>
支援	・公的機関	・勤務先
将来ビジョン	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国内大会優勝、国際大会では入賞を目指していきたい。</li> <li>・パラテコンドーを普及させたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・企業や市民を対象としたパラスポーツ等に関する講演会を行っていく予定。</li> <li>・バドミントンは今後も継続。</li> </ul>
その他特記事項	<ul style="list-style-type: none"> <li>・妻が家事すべてを引き受けてくれており、競技継続上でとても大きな支えとなっている。</li> <li>・国際大会に出場した際に、他国の選手を見ていると、競技以外の場面でもとても楽しそうに過ごしていて、「本当に好きなことをやっているんだな」と感じさせられ、自分が競技を続ける上で刺激をもたらしている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもの頃からスポーツを含め何にでも挑戦できる環境があったことが、その後のスポーツ継続に影響した。</li> <li>・障害者スポーツセンターの存在と職員への活動がパラスポーツをするきっかけと継続につながっている。</li> <li>・東京パラ開催決定後、アスリート助成/雇用などの制度ができ、経済的な支援、練習環境などが整った。</li> </ul>

仮名 22-A さん

インタビュー実施日時 2022年5月17日 13:15-14:45 場所 M市商工会議所会議室

個人基本情報	居住:東海地区 生年月日:1990年 性別:女性 障害発生年齢:先天性 障害状況:視覚障害、1種1級
略歴	小学部より視覚特別支援学校で学び、高等部在学中の2008年18歳で北京2008パラリンピックに出場、21歳で県立視覚特別支援学校の高等部専攻科保健医療科卒業、あん摩マッサージ指圧師の国家資格を取得。2年間のフリー期間を経てG社に所属、31歳で東京2020パラリンピックに出場した。現在はS社に所属し現役選手として活動している。
競技基本情報	競技:柔道 クラス分け:女子70kg 超級(東京2020大会) 主な戦績:2008年北京パラリンピック大会入賞、2009年IBSA柔道ジュニア世界大会メダリスト、2021年東京2020パラリンピック大会入賞 競技開始年齢:15歳
障害発生から 障害者スポーツ開始まで	経緯: ・未熟児網膜症のため視覚障害となる。柔道との出会いは視覚特別支援学校小学部の頃、弟(弱視)が柔道をしていた。当時は柔道で人を投げるイコールやり投げのイメージだったので、ずっと誘われていたが絶対やらないと思っていた。中学部3年の時にバンド活動のポイトレで腹筋強化が必要と知り、高等部の体育授業で経験した柔道が役立ちそうだと感じて柔道を始めることにした。体育の授業で実際に経験し、柔道に対するイメージが変わった。新年度早々に体育の先生から11月の試合に出てくれと言われて、試合に出るなら練習が必要だと思い、即柔道部に入部した。  始めた場所:視覚特別支援学校(高等部) 重要な他者:普通科の体育の先生(柔道経験なし)、W先生(盲学校教諭、視覚障害の柔道家、柔道部の指導者)



<p>障害者スポーツ開始に影響を受けた社会的状況・環境・条件</p>	<p>・普通科がある視覚特別支援学校への進学に伴い体育で柔道を経験したこと、当時井上康生(選手)や野村忠宏(選手)など有名な柔道家がいて、CM やメディアの露出度も高かったことから、柔道の「投げる」はやり投げのイメージではなく、「背負い投」や「大内刈」「外刈」などの技に伴うものと理解できたこと、そして東海地区盲学校柔道大会があり、体育の先生から選手として強く誘われたことである。試合に出るなら、体育だけではダメだと思い柔道部に入部した。</p> <p>・高等部進学に伴い、寄宿舎生活となったが、そこに全日本視覚障害者柔道連盟に関わっているO先生が勧誘に来た。2004 年のアテネパラリンピックから女子の柔道が種目となったことから、女子選手を集めていた。その先生との出会いで、いろいろな技を 1 個ずつ、手取り足取りという形で、自分の中でレパートリーが具体的に増えていった。</p>
<p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p>	<p>・中学部までは運動とは無縁で音楽部、和太鼓をずっとやっていた。中学部の部活ではバンドのボーカル担当、声の出し方に悩んでいた時に、ボイトレで腹筋強化が必要だということを知り、柔道も役立つそうだと感じたこと。</p>
<p>障害者スポーツ継続に関する状況</p>	<p>継続状況:</p> <p>・2008 年北京パラリンピック開催前に、憧れの存在である古賀さんに地元N市での講演会で出会い、2009 年のジュニア大会では古賀さんの対戦相手だった外国選手からメッセージをもらうなど柔道のイメージがスマートでかっこいいものになった。</p> <p>・2013 年専攻科卒業後に柔道と仕事の両立に悩み2年間はフリー(あん摩マッサージ指圧師)で柔道を続け、その後障害者雇用の会社を立ち上げたHさんの紹介でアスリート雇用として就職、柔道に専念できる環境ができた。しかし、2大会続けてパラリンピック出場を逃したことから、柔道の競技環境を変える必要があると思い、2016 年から4年間はS県のU道場にて過ごした。</p> <p>・U道場には、視覚障害者柔道の加藤裕司選手をはじめ日本代表レベルの複数の選手も稽古に通っており、多くの刺激を受けた。特にU先生からは柔道に向かう姿勢、指導法、全盲の柔道を理解した上での理論的</p>

	<p>な指導・助言があり「良き理解者」であった。</p> <p>主な実施場所:U道場</p> <p>重要な他者:Uさん、Hさん</p>
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<p>・柔道に専念できる競技環境との出会いがあった。それは、障害者雇用の会社を立ち上げたHさんの紹介でアスリート雇用として就職できたことである。しかし、2大会連続でパラリンピック出場権を逃したことから新しい競技環境に挑む決意ができたことでU道場と出会った。</p>
今後のスポーツ実施	<p>・東京 2020 パラリンピックが終わり、地元に戻って新しい競技環境を得た。アスリート雇用として、柔道に専念できることから、引き続き第1線で競技を継続し、視覚障害者柔道の認知度を高めたいが、東京パラ開催後もまだ種々のバリアが解消していないことから、今後もパラ選手や障害について知ってもらうことが大切。また、今トレーニングパートナーを探しているが、探し方がわからないので、トレーニングパートナーのマッチング制度があればいいと思う。目指しているレベルに合わせたトレーニングパートナーと指導者は不可欠である。当面引退は考えていないが、J1 の指導者にはなりたいと思っている。見えない人がもっとたくさん柔道に親しんでくれる、そんな環境ができるといい。</p>
まとめ	<p>・特別支援学校の体育授業で経験した柔道がスポーツへの誘いであった。先天性の視覚障害者にとって、スポーツと出会う機会は限定的であり、数少ない機会とタイミングが合致した。パラリンピック出場は通過点でしかなく、生涯現役で進んでいきたい。視覚障害柔道は、IBSA クラス分けが変更となり、J1 である全盲と J2 である弱視のクラスとなった。J1 と J2 では、柔道そのものが違うことから、それらの違いを知った上でコーチングができる指導者、トレーニングパートナーを含む、良き理解者がそろった競技環境があれば競技継続にはプラスである。</p>

(齊藤まゆみ)

仮名 22-B さん

インタビュー実施日時 2022年5月23日 14:00-15:00 場所 オンライン

個人基本情報	<p>居住:東海地区 生年月日:1991年 性別:女性</p> <p>障害発生年齢:26歳 障害状況:右大腿切断、2種3級</p> <p>リハビリ期間:5か月</p>
略歴	<p>大学在学中に体調を崩し(摂食障害)、8年間かけて卒業し、2019年に大学を卒業し就職(障害者雇用)。インタビュー時は在宅勤務により、現在実家で勤務し、トレーニングに通っている。</p>
競技基本情報	<p>競技:陸上競技、短距離、走り幅跳び クラス分け:T63</p> <p>主な戦績:400m(1分21秒50、世界記録)、100m(17秒32)、走り幅跳び(3m60)。100m、走り幅跳びは国内で3~4番手くらい。</p> <p>競技開始年齢:26歳</p>
障害発生から障害者スポーツ開始まで	<p>経緯:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・体調が悪い中、就職活動中に事故に遭い、右脚を切断。障害を持ってどん底という人が多いが、私の場合、その前からどん底で障害を負ってかえってふっ切れた感じがする。</li> <li>・急性期の病院ではMさん(同様の障害の女子陸上選手)の記事を読んでいた。</li> <li>・障害を負ってからは体力をつけなくてはいけない、生きていくためには歩かなくてはならないということで一所懸命リハビリに取り組んだ。</li> <li>・リハビリで入院時の主治医のK先生が義足の陸上競技クラブの関係者だった。この先生を通じて、スポーツのことや陸上クラブに関する情報を得ていた。</li> <li>・はじめの何回かのクラブ参加は両親に車で連れて行ってもらった。免許は受傷前に取っていたが、受傷後左脚アクセル限定に書き換えた。その後は自分で運転して行くようになった。</li> <li>・初めてK市にあるこの陸上クラブに参加したのは入院中の8月くらいだった。12月に退院しその後、定期的に参加するようになった。</li> <li>・切断後すぐに走り始めたので断端部の痛みやケア、ソケットの調整が大変だった。</li> <li>・同じ障害の女性選手二人(Mさん、Oさん)の影響を受けた。自分もあの二人のように走れたり、活動できたりしたらいいなと思った。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 始めた頃は週に 3 回程度、夜に練習していた。</li> <li>・ 最初に大会に出たのは 2018 年の愛知パラ陸上競技大会だった。</li> <li>・ 陸上のほかにも車いすバスケや水泳、アンプティサッカー、トライアスロンなどをやったことがある。</li> <li>・ 陸上競技は仲間もいたし、一人でも続けられるし、板バネ(陸上用義足)のレンタルなどもあり、入りやすかった。</li> </ul> <p>始めた場所: K市の総合運動公園の陸上競技場。ここは一般開放されていて誰でも使ってよい競技場だった。</p> <p>重要な他者:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>①リハビリ期: リハビリで入院時の主治医の K 先生</li> <li>②開始期: 同じ障害の女性選手二人(Mさん、Oさん)。義足の陸上競技クラブのメンバー(様々な情報をもらえた)</li> </ul>
障害者スポーツ開始に影響を受けた社会的状況・環境・条件	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 障害者スポーツの情報を持っているリハビリテーション病院の存在</li> <li>・ 東京 2020 パラリンピック開催による情報量の増加</li> </ul>
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 中高とバスケットボールをやっていた。大学入学後、スポーツはほとんどやっていなかった。</li> <li>・ しかし、一度部活動を経験していたということは、障害を持ってからスポーツを始めたり、継続したりすることに非常にプラスに働いている。特に今は一人で練習することも多く、部活動で練習のルーティーンを経験していたことが役立っている。</li> <li>・ ただバスケットの経験があったが、車いすバスケを初めてやったときは立ってやるバスケットとはちょっと違うぞって感じてそちらには入り込めなかった。</li> </ul>
障害者スポーツ継続に関する状況	<p>継続状況:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 現在、練習は仕事が定時(17:30)に終わってからやっている。トレーニング内容によって終わる時間は異なるが大体 20:30~22:00 くらいまでやっている。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現在は週に 5～6 日練習。クラブの練習はK市の競技場で週に 1～2 日。個人でやるときはY市やS市の競技場や近くのジムに行って練習している。</li> <li>・現在コーチなどについてはおらず、練習計画をたてるのも練習も自分でやっている。土日は走る練習と、ウエイトの二部練をする日もある。</li> <li>・職場とはいろいろと相談して、合宿や遠征の時には配慮してもらっているが、遠征費が出たり、出張扱いになったりということはない。</li> <li>・遠征や義足のソケットの改良などにお金がかかるため、資金面は大変である。ソケットを直すのに 40 万～50 万円かかることもある。</li> <li>・資金面のほかには体のケアやトレーニングのことなどのサポートがあればありがたいと思う。今はほとんど一人でやっている。</li> <li>・試合数は今年に入ってから多い。神戸でパラ陸上の世界選手権があることと、陸連とパラ陸連の連携ができてきて、陸連の大会にも参加可能なものができたためだと思う。スポンサー等がついていない私のような選手にとっては国内で公認大会が増えることはありがたい。</li> <li>・就職してすぐの頃は仕事を覚えるのが精いっぱいだったが、コロナ禍になりリモートで自分の時間もとりやすくなったことから、練習もじっくり取り組めるようになった。それによって会社の上司ともいろいろと相談できるようになった。</li> <li>・アスリート雇用が可能ということになればそちらを選ぶと思う、パリに備えての準備の条件も全く違ってくるので。</li> <li>・現在、県からは強化指定選手として助成金をもらっているが、他にはスポンサーなどはついていない。競技協会の強化指定選手については現在ボーダーラインといったところである。</li> </ul> <p>主な実施場所:K市、Y市、S市などの陸上競技場と近隣のジム</p> <p>重要な他者:クラブのチームメイト(基本一人練習が多いが、週に 1 回でも 2 回でも同じ障害の人と練習できるのは精神的にも大きい)</p>
<p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コロナ禍による在宅勤務により時間が取りやすくなった。</li> <li>・パラリンピック陸連と日本陸連の連携による試合数の増加。</li> <li>・東京 2020 パラリンピックを契機とした自治体における助成金制度の</li> </ul>

況・環境・条件	確立。
今後のスポーツ実施	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 直近の目標はパリパラリンピックに出ること。</li> <li>・ 競技は年齢が 40 代になるまで続けていきたい。競技をしつつ若い選手たちには情報提供したりしてサポートもしていきたい。(自分もそういう人に救われたので)</li> </ul>
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 大学在学中に体調を崩しそれが原因で事故に遭い右脚大腿を切断した。</li> <li>・ 急性期の病院に入院中に同様の障害の選手の記事を読んだこと、リハビリで入院した先の主治医が障害者スポーツに関する情報を持っていたことや義足の陸上競技クラブの関係者であったことから陸上競技のクラブに通うようになった。</li> <li>・ 競技を始めるにあたっては同様の障害の同性の選手 2 人がロールモデルになったと推測される。またクラブに入り、様々な情報が得られるようになったこともよかった。</li> <li>・ 就職後は一般雇用と同じ仕事をこなす時間が取れにくい状況だったが、コロナ禍により在宅勤務となり、時間の調整がしやすくなり練習にもじっくりと取り組めるようになった。</li> <li>・ 現在、県からの助成金を受給しているが、海外遠征や義足ソケット部の改良などにお金がかかっている。</li> <li>・ 神戸でパラ陸上の世界選手権が行われることが決まったことや、パラ陸上競技連盟と日本陸上競技連盟の連携により記録が公認される試合数が増加したことはスポンサーなどがついていない自分にとってはありがたい。</li> <li>・ 目下の目標はパリパラリンピックに出ることだが、その後も 40 代までは競技を続けたいと考えている。自分が救われたように同じような障害のある若い選手をサポートしたいと考えている。</li> </ul>

(藤田紀昭)

仮名 22-Cさん

インタビュー実施日時 2022年6月6日 13:30-15:30 場所 G 県アリーナ会議室

個人基本情報	<p>居住:東海地区 生年月日:1962年 性別:女性</p> <p>障害発生年齢:31歳 障害状況:視覚障害、1種1級</p>
略歴	<p>31歳の時に進行性の眼病が発覚し、30代半ば頃から地元の視覚障害者用図書館でサウンドテーブルテニス(以下、STT)を始めた。2012年の全国障害者スポーツ大会県大会のSTTに初出場し2位となり、その後、同大会に4度出場している。現在も競技を続けながら、STTのサークルを主宰している。</p>
競技基本情報	<p>競技:STT</p> <p>主な戦績:2012年全国障害者スポーツ大会県大会 STT2位</p> <p>競技開始年齢:30代半ば</p>
障害発生から障害者スポーツ開始まで	<p>経緯:</p> <p>・31歳の時に網膜色素変性症を発症していることが明らかになり、徐々に視力が低下し50歳頃に失明した。30代半ば頃に、視覚障害当事者のサークル活動で、地元の図書館でSTTをやるという情報を知り参加した。指導してくれたのはA県のスポーツ指導員であり、(STTの正式ルールではないが)障害のない大学生とダブルスを組んでA県の交流大会に出場し、好成績を残せたことが嬉しく、その後継続的にSTTに取り組むようになった。始めた当初はまだ視力が残っており、晴眼者とペアの時にはアイマスクをしてプレーし、視覚障害者とペアの時にはアイマスクを外して「晴眼者」として参加していた。(当時はSTTのルールが緩やかで)ラリーが「むちゃくちゃ速いし、むちゃくちゃ面白」く、ストレス解消になりどんどん面白くなっていった。</p> <p>始めた場所:G県の視覚障害者用図書館</p> <p>重要な他者:A県のスポーツ指導員</p>
障害者スポーツ開始に影響を受けた社会的状況・環境・	<p>・ボランティアの存在が大きかった。STTのサークルのボランティア募集を始めた当時は、「ボランティアブーム」とも言える状況で、G大学や他大学の学生たちが参加してくれており、彼らとダブルスを組んでA県の交流大会に出場し、好成績を残したことがその後継続していくきっかけとな</p>

条件	った。
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>・障害受傷前は、スポーツが嫌いではなかったが、全くやっていなかった。</li> </ul>
障害者スポーツ継続に関する状況	<p>継続状況：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・サークル内でSTTを始めた当初は、A 県のスポーツ指導員が月に 1 回指導に来てくれていたが、2 年ほど経ち、活動基盤ができてきたから地元のメンバーを募りましょうということで、図書館でボランティア募集をしたところ、G 大学卓球部の学生が参加してくれることになり、その友人たちとともに活動を継続していった。</li> <li>・2012 年開催の地元での全国障害者スポーツ大会県大会に向けて、若手選手の指導をしていたところ、自分自身が県代表として選出され、強化指定選手として活動することになった。その当時、STTの台はサークル活動の拠点であった図書館にしかなく、会議室兼用の部屋となっており、定期的に使用できなかったことから、強化費を活用し M 県や A 県、S 県等の近県で練習に取り組むようになった。</li> <li>・2012 年の全国障害者スポーツ大会の県開催に向けて、STT の台が 3 台購入され、そのうち 1 台が自宅近くの G 市民総合体育館に設置され、現在は週末を中心にボランティアの大学生たちと活動している。</li> <li>・N 市障害者スポーツセンターで開催される東海ブロック大会に毎年出場し、それ以外にも大阪府や秋田県、埼玉県等で行われる交流大会に都合がつけば参加している。</li> <li>・サークルメンバーは高齢化し退会が増えてきている一方で、新たなメンバーを探すことは非常に難しい。盲学校は重複障害の子どもたちが増えており、地域では中高齢期に眼病や視覚障害を発症した方々が多く、体力的な問題があり、勧誘が難しくなっている。</li> <li>・STT の仲間を増やすために活動しているが、少しでも見えている人(弱視の人々)は、「見えていること」をやりたいと考える人もいる。スルーネットピンポン(報告者注:アイマスクを着用せずにプレーし、ルールは</li> </ul>



	<p>STT よりも緩やかであり障害の有無にかかわらず参加できる)に転向する人が増えてきており悩ましい状況である。</p> <p>主な実施場所: G 市民総合体育館</p> <p>重要な他者: 特になし</p>
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<p>・競技を続ける中で、いろいろな場所へ行き、いろいろな人と出会うことに楽しさを感じている。そこで人と会話することで、自分の知らない世界を知ることができる。自分自身が周りに印象付けようとしているわけではないが、全国障害者スポーツ大会に数回出場していると、他県の監督たちから「あなた～大会にいたよね」と声をかけてもらい、このような出会いが、また来年も頑張りたいと思わせてくれるものとなっている。</p>
今後のスポーツ実施	<p>・目が見えなくても、手と足は動ける状態でいたいので続けているというのが正直なところである。</p> <p>・「何歳まで現役を続ける」ということではなく、可能な限り STT に関わっていきたい。</p> <p>・青森県に行ったことがないので、2026 年に青森県で開催予定の全国障害者スポーツ大会に出場したい。</p> <p>・指導者が周りにいないので、自分がプレーをするだけでなく、指導もしているが、教えることも非常に楽しく感じているので、指導もしていきたい。</p>
まとめ	<p>・視覚障害当事者のサークル活動の一環として STT を始めた。</p> <p>・2012 年の全国障害者スポーツ大会県大会に向けて強化指定選手となったが、当時、県内に定期的に使用できる練習施設がなく、近県に遠征し練習に取り組んでいた。</p> <p>・全国各地の大会で出会った仲間たちとの再会が楽しみになっており、競技を継続するモチベーションになっている。</p> <p>・2026 年の全国障害者スポーツ大会青森大会に出場し、選手としてだけでなく指導者としても引き続き STT に関わっていきたいと考えている。</p>

(河西正博)

氏名 22-Dさん

インタビュー実施日時 2022年7月15日 13:30-15:10 場所 オンライン実施

個人基本情報	<p>居住：関東地区 生年月日：1972年 性別：男性</p> <p>障害発生年齢：12歳 骨肉腫により切断（小学校卒業後から中学校入学までの期間） 障害状況：片大腿離断 2種3級</p> <p>リハビリ期間：治療とリハビリで1年余り入院。1年遅れで中学1年を始める。</p>
略歴	<p>中学入学前に切断、中学は地元の普通中学、高校は市外の普通高校、そして市内の大学を卒業。その後市役所に就職、1999年に退職し、関東の企業で選手雇用に（～2008年）。2000年に結婚。2008年からは企業にスポンサーになってもらって競技を続けた。</p>
競技基本情報	<p>競技：車いすテニス</p> <p>主な戦績：国際大会優勝</p> <p>競技開始年齢：13歳</p>
障害発生から 障害者スポーツ開始まで	<p>経緯：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・1年遅れで中学校に復学したため、一つ年齢の下の人たちと同級生となった。そのため、友達となかなかなじめなかった。中学2年生の時、そんな自分を心配した両親がスポーツをやった方がよいと考え、市役所などで尋ねて、居住地近くで車いすバスケットボールをやっているところを見つけてきてくれた。初めて行ったとき、見学のみだったが、実際にプレーさせてもらえた。</li> <li>・車いすバスケットを練習し始めた頃、車いすテニスもだんだん普及し始めてきており、車いすバスケットの練習場所に車いすテニスの人に来てもらい、みんなでテニスの講習会を受けた。やってみると、車いすテニスも面白く、しばらく車いすバスケットと車いすテニスの両方をやっていた。テニスを始めたのも中学2年生の頃。テニスを週1回、バスケットを週1回という感じだった。</li> <li>・車いすテニスの指導をしてくれたのは（車いすテニスの指導者ではなく）市のテニス協会の人たちだった。車いすテニスはこちらというよりはテニスってこういうものだというような指導だった。</li> <li>・車いすバスケットは人数が集まらないとできなかったことから中学3年頃か</li> </ul>

らはテニス一本となった。本当はバスケを続けたかったが当時は自分の障害では、試合に出られないということもあった。結局、バスケのメンバーもテニスの方が面白いということで皆、車いすバスケをやめて車いすテニスをするように。中学では部活には入らず車いすテニスをやっていた。

・高校受験では公立高校は体育の単位が取れない可能性もあり、単位を出してもらえ、少し離れたところに新しくできた私立の高校に行った。高校の間は親に送り迎えしてもらっていたこともあり、テニスはほとんどやっていない。

・高校を卒業して車の免許が取れて、自分で移動ができるようになってからテニスを再開した。大学時代は市内の体育館で、年を追うごとに県外のいろいろなところでやるようになった。

・切断してから学校の体育は中学も高校も見学がほとんどだった。

・大学3年の時初めて海外の試合に出場した。国内の飯塚国際を含め国際大会ではなかなか勝てなかった。

・車いすバスケや車いすテニスをやっていた人たちがしっかりと仕事を持っていたりして、自分にもそのような道が開けるような見通しが持てた。

始めた場所:

(車いすバスケ)居住地近くの勤労福祉体育館で始めた。車で親が連れて行ってくれた。

(車いすテニス)居住地近くの勤労福祉体育館。

重要な他者:

① リハビリ期:家族(両親、姉)、同じ境遇で入院している他の子どもたちに支えられた。

② 開始期:

(車いすバスケ)両親、車いすバスケチームのメンバー(最初からやらせてもらえた)

(車いすテニス)市のテニス協会の人たち

障害者スポーツ開始に影響を受けた社会的状況・環境・条件	<ul style="list-style-type: none"> <li>・車いすテニスが少しずつ普及し始めていた。</li> <li>・市のテニス協会の人から車いすの人も教えてくれた。</li> </ul>
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小学校を卒業するまでは野球をしていた。</li> <li>・野球をしていたことは車いすスポーツを始めるにあたってはプラスしかなかった。</li> </ul>
障害者スポーツ継続に関する状況	<p>継続状況：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・大学卒業後就職したが、テニスをする時間はあまり取れなかった。</li> <li>・大学4年の時国内トップになり、就職2年目にアトランタパラリンピックに出場。技術面、精神面において海外トップ選手との差を見せつけられた。</li> <li>・1999年、5年間務めた市役所を27歳で退職して、企業に選手雇用の形で就職。テニス中心の生活になった。2004年のアテネまでに結果を出そうと決めていた。</li> <li>・継続にあたって影響を受けたのは、教えてもらっていた2人のコーチ、トレーナー、職場(選手雇用)の人たちの応援、そして海外のM選手のサポート。</li> <li>・国際的にトップクラスになれたのは何か一つのきっかけというよりは地道なトレーニングや人々のサポート、自分自身の成長そういうものが積み重なってステップアップしてきたと思う。</li> <li>・2004年国際大会ダブルスで優勝したがシングルスでは優勝できなかった。その後はシングルスでも優勝したいという思いでプレーを続けた。</li> <li>・2008年国際大会ダブルスで銅メダル、2012年の大会ではメダルなし、2016年ダブルスで銅メダル。2021年は出場できなかった。</li> <li>・現在は午前中テニスのトレーニングをして、午後はテニスをやることもあるし、講演等ほかの仕事をすることもある。</li> </ul>

	<p>主な実施場所:C県のテニスクラブ</p> <p>重要な他者:日本人 M コーチ、カナダ人 H コーチ、ドイツ人 H トレーナー、当時の職場の仲間、家族。</p>
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<ul style="list-style-type: none"> <li>・車いすテニスの認知度が高くなり、企業からの注目度が高くなった。</li> <li>・国枝選手が先陣を切っていろいろな環境を変えていってくれた。</li> <li>・東京 2020 パラリンピックの開催</li> <li>・選手雇用、スポンサーの存在</li> </ul>
今後のスポーツ実施	<ul style="list-style-type: none"> <li>・選手としてプレーは続けたい。</li> <li>・いろいろな意味で車いすテニスには貢献していきたい。</li> <li>・車いすテニスをやってみたいのにどうしていいかわからないような人の助け、入り口の部分を支援したい。</li> <li>・自分はパラリンピック出場経験があるので、パラリンピックを目指している人の支援もしたい。</li> <li>・大会運営、大会の立ち上げのようなこともやってみたい。</li> <li>・コーチにも関心があり、一般のテニス指導者の資格も取得した。</li> </ul>
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中学入学前に脚を切断、その後、親からの紹介もあり、中学に入って車いすバスケをやるようになった。その仲間たちと車いすテニスの講習を受けたことから、車いすテニスを始めるようになった。</li> <li>・スポーツ開始時の重要な他者は、両親、車いすバスケチームのメンバー、市テニス協会の人たち。始めたのは障害者も利用できる勤労福祉体育館だった。障害のある人たちの中にいることで自分の将来も開けてくるような思いを持てた。</li> <li>・中学高校の体育はほとんどが見学だった。</li> <li>・高校を卒業し、車の免許を取り、自分で移動ができるようになってから車いすテニスを再開。各所で練習するようになった。</li> <li>・大学 3 年時に初めて海外の大会に出場した。</li> <li>・大学卒業後公務員として働いていたが、車いすテニスにかかる時間のこともあり、退職し選手雇用となった。</li> <li>・車いすテニス継続に大きな影響を与えたのは、支援してくれる家族、所属クラブのコーチやトレーナー、雇用先の会社などであった。</li> <li>・2004 年の国際大会ダブルスで優勝、シングルスでも成績を残したい</li> </ul>

	<p>思いがモチベーションとなってトップレベルでの活躍が続いた。</p> <p>・今後は選手であると同時にコーチや大会のマネジメント、普及活動もしたいと考えている。</p>
--	--

(藤田紀昭)

仮名 22-E さん

インタビュー実施日時 2022 年 7 月 22 日 10:00-12:00 場所 M県福祉センター

個人基本情報	<p>居住:東海地区 生年月日:1977 年 性別:女性 障害発生年齢:5 歳                  障害状況:脳性まひによる四肢体幹機能障害 1 種 2 級                  リハビリ期間:5 歳の頃異変に気づき身体障害者手帳が交付された。幼稚園の頃からリハビリをしていた。</p>
略歴	<p>小学校は特別支援学級、中学校は福祉センターに入所していた。その時のリハビリは大変だった。入所中はいじめもあった。高校は一般高校に進学。短大を卒業し県庁に入職。25, 6 歳の頃から車いすを使用。                  2017 年まで県庁に勤務、体調が悪くなり退職し、その後 2 年間で肩の手術などをした。2019 年 4 月から現職。パート勤務で半日、午後勤務。午前中は自宅で家事をしたり、ヨガマットを使って筋力トレーニングをしたりしている。アスリート雇用ではないが、昨年(2021 年)の半年間くらい練習日(金曜日)の半日を勤務扱いにしてくれた。(昨年は県の全国障害者スポーツ大会が開催予定だったが中止となった。)                  泳ぐ練習は週 1 日、S市まで通って県営プールで練習中。</p>
競技基本情報	<p>競技:水泳 クラス分け:S6 SB6                  主な戦績:全国障害者スポーツ大会(2010 年)初出場、中部障害者水泳大会、日本選手権出場                  競技開始年齢:25 歳(水泳)</p>
障害発生から障害者スポーツ開始まで	<p>経緯:                  ・県庁に就職して数年後(23,4歳の頃)に研修で来た車いすの男性 N さんの影響を受け、車いすテニスをやったのが体育以外の初めてのスポーツ体験だった。車いすテニスを Y市でやっているという情報を得て、自分で体育館まで運転をして行った。                  ・車いす自体にあまりいいイメージを持っていなかったことや、車いす操作やラケット操作が難しく車いすテニスは数か月でやめた。                  ・ほぼ同時期(23,4 歳の頃)にセーリングも始めた。こちらも N さんから情報を得て、誘ってもらって始めた。海には最初 N さんも一緒に行った。セーリングチームでは幽霊会員のようなであったが、時々イベントの時などに駆り出されて 10 年ほど続いた。M県での全スボ前に手術をするまで</p>

	<p>続いた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・セーリングに出会った後、職場のストレス解消に水泳を始めようとしたが、プールがバリアフリーでなかったり、断られたりすることが多かった。</li> <li>・短大時代の友人(福祉施設に勤務)に相談したところダイビングを勧められ、体験した。陸上で車いすに拘束されているのとは違い、浮遊感があり、自由に動けるところが非常に魅力的ではまった。</li> <li>・27歳(2004年4月)の時PADIの初級免許を取得した。ダイビングは現在も続けており、200本くらい潜った。</li> <li>・小学校の時、少しだけ水泳の授業に参加したことがあったことや、セーリングで魚を見ることがあり、自分も泳いだらどんな感じだろうと関心を持っていた。</li> <li>・水泳に関しては県内のプールを泳がせてもらうようお願いをしたが20件近く断られた後、ようやく受け入れてくれるところが見つかった。更衣室は階段を上がって2階にあったが、1階の子ども用更衣室を利用させてくれた。ここには障害者の水泳クラスもあった。この水泳クラブが2015年建て替えの時には建物をバリアフリーにしてくれ、多目的更衣室も作ってくれた。</li> </ul> <p>始めた場所：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・車いすテニス：Y市の体育館</li> <li>・セーリング・ダイビング：I市の海</li> <li>・水泳：T市のスイミングスクール</li> </ul> <p>重要な他者：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・車いすテニス：Nさん</li> <li>・セーリング：Nさん夫妻、I市のセーリング組織の代表のGさん。</li> <li>・ダイビング：短大時代の友人、ダイビングを教えてくれたIさん男性</li> <li>・水泳：スイミングスクールのコーチ</li> </ul>
<p>障害者スポーツ開始に影響を受けた社会的状況・環境・</p>	<p>県内にバリアフリーツアーセンターという組織があり、障害者スポーツに関する情報を持っている関係者と出会えた。</p>



条件	
<p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小学校は特別支援学級所属で、体育の時間はリハビリなど他のことをやっていた。水泳だけは少しだけやった。中学も同様に体育らしいものはなかった。その影響で障害者がスポーツをするという概念がなかった。高校では体育でダンスを選択した。</li> <li>・セーリングやダイビング・水泳を好むのは、少しだけではあったが小学校での水泳経験が影響していると思っている。</li> </ul>
<p>障害者スポーツ継続に関する状況</p>	<p>継続状況：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・現在続けているのは水泳とダイビング。</li> <li>・セーリングは、M県での全国障害者スポーツ大会を目指すために肩の腱板を手術したこともあり、水泳に専念するためにやめた。</li> <li>・水泳は現在、週に1回S市のプールで泳いでいる。そのほかの日は陸上での筋力トレーニングなどを行っている。</li> <li>・ダイビングは奄美大島を拠点として続けている。一人で移動し、ダイビングクラブのスタッフ等に支えてもらいながら継続している。</li> </ul> <p>主な実施場所：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ダイビング：伊豆→名古屋→奄美大島</li> <li>・水泳：T市のスイミングスクール→S市のプール</li> </ul> <p>重要な他者：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ダイビング：伊豆のインストラクター、ダイビング仲間(医療関係者や福祉関係者がいた)、奄美大島のダイビングクラブのスタッフ</li> <li>・水泳：スイミングスクールのコーチ</li> <li>・レディースクリニック(アスリート外来)のドクター</li> </ul>
<p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地元での全国障害者スポーツ大会開催決定</li> </ul>
<p>今後のスポーツ実施</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地元での全国障害者スポーツ大会が中止となり大変ショックを受けた。</li> <li>・水泳をやめようかとも思ったが、それなりにきちんと泳いだという結果を残すべきというコーチの言葉もあり、2023 年度に実施される鹿児島大</li> </ul>

	<p>会までは泳ごうと決めている。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ジャパンパラリンピック水泳大会にも出場したいと考えている。自分の今のレベルでは難しいが生涯スポーツの目標として頑張りたい。</li> <li>・ダイビングは旅行の一環(スポーツツーリズム)のような感覚で継続して楽しみたい。ダイビングを継続するのであれば水泳も続ける方がいいと思っている。</li> </ul>
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・短大を卒業後、就職した職場で車いすの男性(障害者スポーツに関する情報を多く持っていた)と出会ったことがきっかけで、車いすテニスやセーリングを体験した。</li> <li>・短大時代の友人からの勧めもあり、ダイビングをするようになる。水中は車いすに拘束されることもなく、自由に動けることに魅力を感じた。</li> <li>・2004年にはダイビングの免許も取得した。諸般の理由から拠点となる海は変わったが、現在は奄美大島を拠点にダイビングを自律的に楽しんでいる。</li> <li>・職場のストレス解消のために水泳をしたいと思っていたが、なかなか受け入れてもらえるところが見つからなかった。</li> <li>・T市内に障害者の水泳教室を持っているスイミングスクールがあり、そこで受け入れてもらった。バリアフリーではなかったが、1階の子ども用更衣室を使用させてくれるなど配慮してもらえた。</li> <li>・体調や肩の調子が悪くなったこともあり、仕事を一旦やめ、腱板の手術などをし、地元開催の全国障害者スポーツ大会に備えることにした。</li> <li>・大会がコロナ禍により中止となりショックを受けたが、区切りをつけるために鹿児島大会までは頑張ろうと決意している。またダイビングを続けるのであれば水泳も続けた方がいいだろうと考えている。</li> <li>・ダイビングは楽しみとして続けたいと考えている。</li> </ul>

(藤田紀昭)

仮名 22-F さん

インタビュー実施日時 場所 2022年7月25日 18:00-20:00 場所 オンライン

個人基本情報	<p>居住:東海地区 生年月日:1979年 性別:男性</p> <p>障害発生年齢:19歳 障害内容:両下肢機能障害(脊髄損傷)1級</p> <p>リハビリ期間:事故後、7か月入院</p>
略歴	<p>事故前 大学生</p> <p>事故後、通っていた大学は中退。退院後に、別の大学を受験して入学。卒業後は、一般企業に就職し、現在は公務員。</p>
競技基本情報	<p>競技:卓球 クラス分け:クラス4</p> <p>競技成績: ITTF PTT ジャパンオープン 2019 東京大会 団体メダリスト</p> <p>競技開始年齢:13歳 中学、高校で卓球部に所属</p> <p>事故後、32歳で卓球を再開</p>
障害発生から障害者スポーツ開始まで	<p>経緯:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・中学、高校と卓球部に所属していた。19歳で事故に遭い7か月ほど入院した。自分は治ると思っていたが、入院中に知り合ったおじさんが「1年後か、10年後かに治るかもしれないけれど、例えば10年後に治るとして、じゃあその間の10年は無駄に過ごしていいのかわ。どうせだったら楽しく過ごした方がいいんじゃないか。」と話され、その通りだと感じた。この入院期間に障害に対する気持ちの切り替えができたように思う。</li> <li>・受傷後、一般企業勤務を経て、教員となる。卓球部の顧問として生徒の練習をみるうちに、自分でもやってみようという気持ちになり、卓球を再開する。</li> </ul> <p>始めた場所:勤務校の部活動</p> <p>重要な他者:部活動の生徒</p>
障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<p>特になし</p>
受傷前スポーツ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小学校は野球部、中学、高校は卓球部。</li> </ul>

ツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学進学後も、地元の卓球チームで継続。</li> <li>・受傷後に教員となる。受傷前に行っていた卓球なら指導できると、卓球部の顧問に就任する。生徒を指導しているうちに、自分もやりたくなってきた。</li> </ul>
障害者スポーツ継続に関する状況	<p>継続状況：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・大会に出場していく中で、東京都在住の車いす選手に出会い、日頃の練習方法や競技への向き合い方などを教わる。自ら行動をして環境整備を進める姿を見て、自分が行動すれば環境は変えられるという考えに至り、居住している行政の障害福祉課に連絡をして、地域の一般の卓球クラブを紹介してもらう。週1回、練習に通う中で、障害者への指導経験がなかった卓球クラブのコーチが、自らも車いすに乗って指導を行ってくれた。マンツーマンレッスンを受けるうちに結果が残せるようになってきた。</li> </ul> <p>主な実施場所：地域の一般の卓球クラブ</p> <p>重要な他者：①車いす卓球選手の先輩 ②通っている卓球クラブのコーチ</p>
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<ul style="list-style-type: none"> <li>・障害を理解して受け入れてくれた地域の卓球クラブ、自ら車いすに乗り、パラ卓球の特性を理解して指導にあたった卓球クラブのコーチの存在が、居住地域に同じ障害で卓球をしている人が少ない環境においては、大きな支えになった。</li> <li>・県のパラリンピック等選手強化指定や、県の障がい者卓球協会からの活動補助費で活動支援をしてもらっている。</li> </ul>
今後のスポーツ実施	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2024年度のパリ・パラリンピック、2028年のロサンゼルス・パラリンピックの出場を目指して、国際大会への出場を含めて全力で取り組んでいきたい。</li> <li>・2028年以降も家族や職場の理解が得られて、出られる環境にあれば、可能な範囲で大会には出場して生涯スポーツとしての卓球を続けていきたい。</li> </ul>
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・受傷後、勤務先の部活動指導をきっかけに受傷前に行っていた卓球を再開した。</li> <li>・同じ障害の選手に出会い、練習環境を知る中で、自らで行動をして環境</li> </ul>

	<p>を変えていくことの重要性を理解して、行動に移し環境を作っていた。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・身近な地域にパラ卓球のクラブがなくても、障害を理解してくれるチームメイトや指導者がいれば、卓球の練習が継続できることを証明した。</li><li>・うまくなりたい、海外の大会に出場して勝ちたいという想いが自らの行動の原動力になった。</li><li>・障害があるからこそ、日本代表として国際大会に出場できるチャンスがあるということをポジティブに捉えて、目標にして、より上達する環境改善や日々の練習に取り組んでいる。</li></ul>
--	--

(小淵和也)

仮名 22-G さん

インタビュー実施日時 2022年7月28日 13:00-14:40 場所 T市(選手自宅)

個人基本情報	<p>居住:東海地区 生年月日:1997年 性別:女性</p> <p>障害発生年齢:0歳 障害状況:脳性まひ、1種1級</p> <p>食事は体調により介助が必要な時と自分で食べられる時がある。</p>
略歴	<p>小学校は普通学校に通学。中学校(中等部)と高等部の途中までは特別支援学校に通学。特別支援学校高等部の時に治療に専念するため1年休学。その後復学したが、諸般の事情で退学。現在、自宅で書類づくりなどの仕事をしている。</p> <p>これまでに障害に伴う手術を11回(2007, 2011, 2012, 2013, 2015(3回), 2016, 2017, 2020, 2021)受けている。</p> <p>ボッチャを始めるまでは日常生活の中で少しでも歩けるようになるような方向性で、ボッチャを始めてからは長く座れるような(プレーにプラスになる)方向で手術を行ってきた。</p>
競技基本情報	<p>競技:ボッチャ クラス分け:BC1 BC2</p> <p>主な戦績:BC1:日本選手権出場 BC2:アジアユースパラ ベスト8</p> <p>競技開始年齢:18歳</p>
障害発生から障害者スポーツ開始まで	<p>経緯:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・小学校の時、部活動はしていない。体育も一部参加する程度だった。</li> <li>・特別支援学校中等部に入ってから中等部2年の途中まで車いすバスケットボール部に入った。車いすを漕ぎながらボールを保持することが難しかった。ツインバスケットボールのゴールにシュートをしていた。それでもスポーツができるということがうれしかった。</li> <li>・中等部1年生の時に体育の授業で初めてボッチャをした。しかし、教員が自分でジャックにランプを合わせるようなやり方で全く面白くなかった。</li> <li>・手術後の体の状況で可能な陸上競技やパターゴルフなども少しだけやった。</li> <li>・2015年手術後に県内リハビリテーション機関に移り、そのPTにボッチャの練習会場などについて情報をもらった。</li> <li>・その後入院中ではあったが、外泊許可をもらい、隣県のボッチャ協会の</li> </ul>

	<p>練習会に行った。中等部の体育でやったボッチャとは全く違い、自分でボールを投げ、面白いと思った。その後、練習を見学に行ったとき、E 選手の練習を見て輝いて見え、このような選手になりたいと思った。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・その後、リハビリ機関の PT がボールを持ってきてくれ、リハビリの一環としてボッチャをするようになった。ボッチャがリハビリの最後にできるといことでリハビリも頑張ろうという気になった。</li> <li>・2 か月後に 2015 年 11 月に県協会の大会があると聞き、出たいと思い、出た結果(始めてから 2 週間)、3 位に入り、大会前に「入賞したらボールを買ってくれる」という約束をしていたので、ボールを購入した。</li> </ul> <p>始めた場所: 隣県内の障害者スポーツセンター</p> <p>重要な他者:</p> <p>開始期: 輝いて見えた E 選手、ルールを教えてくれた E 選手の父、最初の練習で声をかけてくれた K 選手、送り迎えや様々なサポートしてくれる母親、ボッチャに関する情報をくれたリハビリ機関の PT</p>
障害者スポーツ開始に影響を受けた社会的状況・環境・条件	<ul style="list-style-type: none"> <li>・県内にボッチャ協会があり、練習会をしていた。そこで、ロールモデルとなるような選手がすでにいた。</li> <li>・リハビリ機関の PT がボッチャに関する情報を持っていた。</li> </ul>
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>・体育の授業は見学が多かった。自分では運動はできないものと思いこんでいた。</li> <li>・自分の特別ルールで参加することはあったがみんなと同じように参加したことはない。</li> <li>・水泳は母親がいるときには参加できた。運動会でも同様であった。</li> </ul>
障害者スポーツ継続に関する状況	<p>継続状況:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・初めての大会に出た後、退院後、隣県の協会の練習会や K 選手の主催する練習会に参加していた。</li> <li>・翌年 3 月に隣県の協会の合宿に参加した。その時に同じ女性選手 M 選手と出会った。代表の話や海外の話聞き、大変面白く、参考になった。女性選手に出会ったことは大きい。これが一つのきっかけとなり、ボッチ</li> </ul>

ヤにはまっていた。

- ・ボッチャ以外のスポーツで自分の判断や自分の体を使って主体的にやれるものはない。その中で、思ったところにボールが行ったり、点数が取れたりするところが面白い。
- ・その後、日本選手権の予選にも出るようになった。なかなか勝てないが、いつか勝てるようになるかもしれないという思いがあり、自分の中のやる気スイッチが入ったような気がした。その後練習頻度も増えた。
- ・2016年にE選手も所属しているチームに入って練習するようになった。これは県協会の総会の時に所属選手から声をかけてもらったのがきっかけである。
- ・2018年に日本選手権本戦に初めて出場した。1勝したが予選リーグ敗退だった。
- ・2019年はコンディショニングがうまくいかず、体に痛みがあり、予選大会で敗戦した。これがきっかけで医学生が使うアプリを入れ、体の機能や構造(解剖学)について勉強するようになった。今はリハビリの先生と身体機能や手術のことなど専門用語で会話するほどである。
- ・現在はほぼ毎日練習をしている。投球を伴う練習ばかりでなく、ポジション(体の姿勢)や、素振り、YouTube を使って戦略の勉強などを毎日している。投球練習は週に2回くらい。
- ・今はボッチャが自分のすべてと言っても過言でないくらいである。
- ・ボッチャで座って、投げやすい姿勢でプレーできるように自力で歩けなくなることを覚悟して腸腰筋を切ってもらった。自分で研究して、股関節、ひざ、足首が直角だと姿勢が保てるとわかり、アキレス腱や股関節の手術も、そうするためのものだった。
- ・支援してくれている母親のためにも結果を出したいと思っている。
- ・現在、県の強化指定選手として助成金を受けている。

主な実施場所：障害者スポーツセンター、近隣の公共の体育館や公民館など

重要な他者：コーチ(E選手の父)、母親、E選手、M選手(女性)などボッチャの県内選手



スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域のボッチャチームの存在</li> <li>・東京 2020 パラリンピック開催決定をうけて、自治体の強化支援制度の確立</li> </ul>
今後のスポーツ実施	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現在、ボッチャのプレークラスが変わるかもしれないという状況なのでまず気持ちを整理して、自分に厳しくして日本選手権に出て代表選手になりたいと思っている。</li> </ul>
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スポーツ(ボッチャ)を始めるにあたっては、ボッチャの先輩選手、選手関係者(選手の父)、母親、リハビリ機関の PT が重要な他者として挙げられた。</li> <li>・PTによる情報提供→母親による練習場所への移動支援→ボッチャの先輩選手による影響といった過程を見ることができる。</li> <li>・隣県にボッチャ協会があり、練習の機会が提供されていたこともボッチャを始め、継続できた条件として挙げられる。</li> <li>・初めてボッチャを体験したのは中等部在学中であったが、その時は教員の知識不足あるいは経験不足の影響から面白いスポーツとは感じる事ができなかった。</li> <li>・継続の要因としては、同性の選手の存在、先輩選手、コーチ、母親らの影響や支援を挙げることができる。</li> <li>・ボッチャにおいてできるだけよいパフォーマンスを期待して何回かの手術をしており、中には体の機能を低下させる(歩けなくなる)可能性のある手術も含まれていた。</li> <li>・ボッチャ継続の内的動機づけとしては、自分自身で考え自分の体を使って主体的に参加できることのうれしさ→試合で勝てないことの悔しさと、勝てるかもしれないという可能性を認識→自分の身体状況を自己研究・自己分析することによる可能性の見出しとパフォーマンスに対する向上心と支援者への恩返し、と変化している。</li> <li>・現在クラス変更の可能性があり、そのことに対する気持ちの整理をしようと努力している段階である。</li> </ul>

(藤田紀昭)

仮名 22-Hさん

インタビュー実施日時 2022年8月2日 13:00-14:30 場所 G市G交流会館

個人基本情報	<p>居住:東海地区 生年月日:1990年 性別:男性</p> <p>障害発生年齢:14歳(中学3年夏頃)</p> <p>障害状況:視覚障害(レーベル病)視力 0.01-0.02 1種1級</p>
略歴	<p>中学までは普通学校、高校から盲学校、その後、専攻科で鍼灸マッサージの資格を取得。ゴールボールなどスポーツをやる中でいろいろな人と会ったり、話したりすることで自然に障害のこを受け入れられるようになった。資格取得後から現在のG病院勤務。障害者雇用、透析患者のマッサージを担当。2022年に結婚。</p>
競技基本情報	<p>競技:グランドソフトボール、ゴールボール</p> <p>主な戦績:日本ゴールボール選手権メダリスト、2009年アジアユースパラ大会メダリスト、2018年アジアパラ競技大会入賞。2015年頃育成選手、2016年に強化指定選手。2019年まで日本代表候補だったが、その後選考に漏れ、2021年に代表候補に復帰。</p> <p>競技開始年齢:高校1年3月 18歳からゴールボールを始め高校2年から本格的に実施。</p>
障害発生から障害者スポーツ開始まで	<p>経緯:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・高校では陸上、グランドソフトボールを掛け持ちしていた。</li> <li>・高1の3月先輩に誘われてゴールボールを始めた。2年生の時から熱心にするようになった。火、木はゴールボール、他の日はグランドソフトボールをした。</li> <li>・高2の時ゴールボールの大会に初めて出場した。</li> </ul> <p>始めた場所:盲学校</p> <p>重要な他者:</p> <p>開始期(ゴールボール):誘ってくれた先輩と友人、盲学校ゴールボール部顧問の教諭</p>
障害者スポーツ開始に影響を受けた社会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・様々な人の支援が得られたこと</li> <li>・地元開催の全国障害者スポーツ大会があり、県全体が選手に対して支援しやすい環境があった。</li> </ul>

<p>的状況・環境・条件</p>	
<p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小学校 3 年から兄の影響で野球を始めた。中学校ではバレーボール部。</li> <li>・高校では陸上、グランドソフトボールをかけ持ちして当初行った。</li> <li>・高校では三線やギターも弾いたりしていた。</li> <li>・グランドソフトボールやゴールボールはボールを取りに行くという点では野球やバレーボールと似ているため、障害発生前のスポーツ経験はプラスに働いている。</li> </ul>
<p>障害者スポーツ継続に関する状況</p>	<p>継続状況:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・グランドソフトも並行してプレーしていた(週 1 回程度)。大会(2012 年度全国障害者スポーツ大会)に出場。大会終了後の 2013 年までプレーしていた。</li> <li>・その後はゴールボール一本で、現在も週に 3 日から 4 日練習している。合わせて練習のないときにウエイトトレーニングをしている。</li> <li>・練習場所は地区公民館の体育館、市の交流館の体育館、盲学校、G 市にある県の障害者用体育館などで週末は代表合宿などにも参加する。</li> <li>・1 日の生活は 8 時前に出勤して、17:15 まで仕事。そののちに交流館体育館(職場の近く)などで 2 時間程度練習。ほかに時間が空いているときにウエイトトレーニング。ウエイトトレーニングは自宅の一部屋を改装して、そこでやっている。</li> <li>・練習は日常的には 2~3 人ですることが多い。</li> <li>・2019 年までは日本代表候補に入っていたが、2019 年に漏れたため、東京 2020 パラリンピックには出場できなかった。</li> </ul> <p>主な実施場所:地区公民館の体育館、市の交流館の体育館、盲学校、G 市の県の障害者用体育館など</p> <p>重要な他者:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学生時代は部活動の顧問教諭</li> <li>・就職後は県の教育委員会の人(スポーツ課、特別支援学校の先生)、元同じ職場の男性看護師(練習をサポート)、職場の理解(海外遠征など</li> </ul>

	有休をとらなくても行かせてもらえる)
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地元で開催された全国大会(2012年10月)があり、就職(同年9月)後、すぐに大会に出るための休みがもらえた。その後も県のスポーツ課の方の理解があり支援してもらっている。</li> </ul>
今後のスポーツ実施	<ul style="list-style-type: none"> <li>・当面の目標は、パリパラリンピックに出場すること。2021年に代表合宿に再び呼ばれるようになった。</li> <li>・個人としては代表になるために前回うまくいかなかったところをカバーできるよう練習したい。</li> <li>・アジアで2位に入れば世界選手権に出場でき、そこでいい成績を残せばパラリンピックに出場できる。</li> <li>・パリの先はあまり考えていないができるだけ長くプレーを続けたいと考えている。</li> </ul>
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中学校までは普通学校に通っていたが視力が落ち始め、高校からは盲学校に通う。</li> <li>・盲学校では部活動で、グランドソフトボール、陸上、ゴールボールなど掛け持ちで参加していた。部活動に入るきっかけは先輩や友人に誘われたこと。</li> <li>・2012年に地元開催の大会があり、就職の時はこの大会出場に配慮してくれるところを探し、現在の職場に就職した。</li> <li>・グランドソフトボールと、ゴールボールを並行してプレーしていたが大会後ゴールボール一本にした。</li> <li>・現在、職場近くの体育館や障害者専用体育館、盲学校などで練習している。また、改装した自宅の部屋でウェイトトレーニングをしている。</li> <li>・就職後は、教育委員会関係者(盲学校の体育の先生)、職場の理解者などの支援を受け練習を続けている。</li> <li>・当面の目標はパリパラリンピックに出場すること。また、プレーはその後でもできるだけ長く続けたいと考えている。</li> </ul>

(藤田紀昭)

仮名 22-Iさん

インタビュー実施日時 2022年8月23日 14:00-15:00 場所 オンライン

個人基本情報	<p>居住:東海地区 生年月日:1999年 性別:男性</p> <p>障害発生年齢:4歳くらいの時に筋ジストロフィーの診断が出た</p> <p>障害状況:筋ジストロフィー 1種1級</p>
略歴	<p>小学校4年の途中までは普通学校、その後、特別支援学校に高等部まで通学。卒業後、福祉関連施設に就職。2度の転職を経て現在は選手雇用で就労。ボッチャは小学2年生の時に始め、最初はBC4クラス、現在BC3クラス、母親がランプオペレータ(ROと略。いわゆるアシスタント)。</p>
競技基本情報	<p>競技:ボッチャ クラス分け:BC3</p> <p>主な戦績:国際大会メダリスト</p> <p>競技開始年齢:7歳(小学2年生)</p>
障害発生から 障害者スポーツ開始まで	<p>経緯:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・小学2年生の頃、所属している当事者団体主催のサマースクールの企画でボッチャを体験する機会があった。体験してみて面白いかもと興味を持った。</li> <li>・その後、当事者団体の仲間と当初は月に1~2回の県のボッチャ協会の練習に行くくらいだった。</li> <li>・最初の頃はボッチャそのものというより、練習の後みんなで集まってゲームをしたりする方が楽しかった。</li> <li>・翌年、県の大会に初めて出たが初戦敗退。負けず嫌いなのでそこから強くなりたいと本格的に練習を始めた。</li> </ul> <p>始めた場所:N市障害者スポーツセンター</p> <p>重要な他者:</p> <p>開始期:当事者団体の年上のお兄さんたちがいてくれたことで自然に始められた。練習会場までの移動などでは家族の協力がなくては続けられなかったなので、家族。</p>

障害者スポーツ開始に影響を受けた社会的状況・環境・条件	<ul style="list-style-type: none"> <li>・当事者団体に所属していたこと</li> <li>・県内にボッチャ協会があり、ボッチャの体験ができたこと</li> <li>・家族の支援を全面的に受けられたこと</li> <li>・障害者スポーツセンターがあったこと</li> </ul>
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>・普通学校に通っていた最初の頃は自分で歩けたので、体育もやれるところはやった。その後、車いすになってからは見学が多かった。</li> <li>・特別支援学校に転校してからは体育の授業も参加できた。</li> <li>・ボッチャに出会うまでは学校の体育以外でスポーツをやった経験はない。</li> </ul>
障害者スポーツ継続に関する状況	<p>継続状況：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・家族のサポートが大きかった。これがなければ当然だが、ボッチャを続けることはできなかった。</li> <li>・県内にボッチャ協会があり、定期的に練習会が開催され、プレーする機会を持てたことも大きい。</li> <li>・県ボッチャ協会の練習の時に日本ボッチャ協会の人に来ていて、日本選手権にも出られることを知った。また、この県からも出ている人がいるということで自分も小学校5年生くらいの中から日本選手権にも出場するようになった。</li> <li>・最初の日本選手権大会は予選リーグで敗退した。</li> <li>・日本選手権に出るようになってからそのために県協会の練習会以外に自宅で基本練習などするようになった。</li> <li>・中学校2年生の頃県の大会で2位(BC4)になったことがある。</li> <li>・日本選手権でよい成績を残すようになったのはBC3になる頃(中学卒業後～高校入学の間)。</li> <li>・BC4からBC3にクラスが変更になるときは病気の進行で投げられなくなるのは嫌だなあと感じた。ボッチャ以外の電動車いすサッカーを見に行っただが、ぶつかり合いが激しかったりスピードが速かったりして怖かった。やはりボッチャがいいということで続けることにした。自分より前に同様にBC4からBC3にクラスを変わったKさんがいてイメージはしやすかった。このときはKさん、県協会、日本協会、そして家族の励ましが</li> </ul>

	<p>あつて頑張ろうという気持ちになれた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・この頃東京 2020 パラリンピック開催が決まり、出たい、世界最高の舞台上で活躍したいと思うようになった。</li> <li>・高校時代、練習は授業の関係で週 1 回、卒業後は週に 3~4 回(在宅就労だったので)できるようになった。</li> <li>・ある体育館で練習しているとき、その体育館を管理している会社の方に所属のことを相談したところ応援して下さるということになり、その会社に就職し、練習場所として貸してもらえるようになった。</li> <li>・海外遠征にはROと 2 名分の旅費が必要になり、経済的に厳しいところがあるが、家族や日本協会からの補助、県からの強化選手補助金、「応援する会」からの援助、勤務先の援助などがあり、まかなうことができています。</li> <li>・その後 2018、2019、2020 年に日本選手権優勝。</li> <li>・現在、選手雇用で T 社(中央競技団体のスポンサーでもある)所属。</li> <li>・現在は練習に合わせて起床し準備をする。午後から夕方まで練習することが多い。午前から夕方までやることもある。その後帰宅し、夕食を取り就寝という生活パターンである。</li> <li>・障害のこともあるし、スポーツ選手としては当たり前のことだが、けがや病気といったことには非常に気を付けている。ポッチャをやっているから逆に健康でいられるというところがあるように思う。</li> <li>・母親はうちでは「親」だが、ポッチャをやっているときは「RO かつ、競技パートナー」といった感じ。</li> </ul> <p>主な実施場所:公共の体育館の予約を取って使用。 重要な他者:家族、会社、コーチ</p>
<p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・東京 2020 パラリンピックの開催決定</li> <li>・会社の理解</li> <li>・コロナ禍</li> </ul>
<p>今後のスポーツ実施</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・パリパラリンピックを目指す。そこで「金」をとりたい。個人戦でも頑張りたい。</li> <li>・パリの後のことまでは今は考えられない。</li> </ul>

まとめ	<ul style="list-style-type: none"><li>・当事者団体の企画で体験したのが初めてのボッチャだった。</li><li>・この当事者団体の仲間何人かがボッチャをすでにやっていたこともあり、すんなりと練習に行けるようになった。小学校段階でのことであり、送り迎えやそのことも含めて家族の支援がなくてはできなかった。</li><li>・県内に競技団体があり定期的に練習会を開催しているなどボッチャをやる環境があったことも大きい。</li><li>・負けず嫌いの性格から、ボッチャにだんだんとのめりこんでいった。</li><li>・障害の進行から途中でクラスを変わらざるを得なかったが、ロールモデルとなる選手がいたことや、周りの支援のおかげでボッチャを継続するようになった。</li><li>・この頃、東京 2020 パラリンピック開催が決まり、大きな目標となった。</li><li>・ボッチャ継続に関しては、家族の支援、会社の理解、コーチの存在が大きいという。</li><li>・現在はパリで、東京以上の成績を残すことを目的に頑張っている。</li></ul>
-----	--

(藤田紀昭)



仮名 22-Jさん

インタビュー実施日時 2022年 8月 28日 10:00-11:30 場所 オンライン

個人基本情報	<p>居住:東海地区 生年月日:1982年 性別:男性</p> <p>障害発生年齢:先天性 障害状況:左上肢機能障害、3級</p>
略歴	<p>4年ほど前に地元の道場でテコンドーを始めた。現在は公務員として働きながら、2022年度から全日本テコンドー協会(パラテコンドー・キョルギ)の強化指定選手として活動している。</p>
競技基本情報	<p>競技:パラテコンドー</p> <p>主な戦績:2022年全日本選手権(パラキョルギ)メダリスト、2022年アジアパラテコンドーオープン選手権メダリスト</p> <p>競技開始年齢:36歳</p>
障害発生から障害者スポーツ開始まで	<p>経緯:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・小学生の頃にソフトボールを少し経験した程度で、学校体育以外のスポーツ経験はほとんどなかった。</li> <li>・本心ではスポーツに対して憧れを持っており、取り組みたいと思っていたが、「自分には無理」と思っていた。また、障害に関して注目されたくないという思いが強く引っ込み思案になっていて、スポーツをやる前からあきらめていた。自分がプレイヤーとしてスポーツに取り組むことは頭になかったが、その時々には流行っているスポーツやいろいろな大会は見ており、高校時代はK-1などの格闘技をよく見ていた。</li> <li>・2017年頃に、テレビでパラテコンドーが東京2020パラリンピックの実施種目に入ることを知った。2000年のシドニーオリンピックで、岡本依子選手が銅メダルを獲ったことは知っており、テコンドーがどのような競技であるのかはなんとなく理解していた。パラリンピック競技でコンタクトスポーツは珍しく、面白そうな感じがしたと同時に、本当は何らかのスポーツをしたいという思いを持ち続けており、インターネットでテコンドー道場を探して、現在所属している道場で活動を始めた。</li> <li>・始めた当初は具体的な目標があったわけではなく、まず取り組んでみて自分に適性があるのかどうかを確かめたいという感覚であった。</li> <li>・東京2020パラリンピック開催でパラテコンドーの認知が少しは広がったと感じているが、自分が若い頃にパラスポーツを知る機会があれば、</li> </ul>

	<p>もう少し早く何らかのスポーツを始められたのかもしれないと感じている。</p> <p>始めた場所: 地元のテコンドー道場</p> <p>重要な他者: 道場の先生</p>
<p>障害者スポーツ開始に影響を受けた社会的状況・環境・条件</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・道場の先生がM県で道場を開く前に指導していた道場で、パラテコンドー選手の指導経験があったとのことであった。</li> <li>・問い合わせの電話をする際に、「パラテコンドー」と言って理解してもらえるのか不安だったが、「指導したことがあるので大丈夫ですよ」とのことですスムーズに参加することができた。</li> </ul>
<p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校体育以外のスポーツ経験はほとんどなく、社会人になってから趣味でランニングをする程度であった。</li> </ul>
<p>障害者スポーツ継続に関する状況</p>	<p>継続状況:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・始めた当初は「えらい所に来てしまったな」という感覚で、障害のない選手たちのレベルが桁違いで、衝撃的だったことを覚えている。正直なところきついなと思いながらも、自分でやりたいと決めて始めたので、ある程度のところまでは続けたいと思い、なんとか続けてこられた。</li> <li>・道場の先生が丁寧に指導をしてくれ、励ましてくれる中で、少しずつ上達していき、「強化指定選手を目指したい、全日本選手権で成績を残したい」と思うようになった。</li> <li>・M県身体障害者総合福祉センターのパラスポーツ選手の助成制度に応募をした際に、理学療法士を紹介されて、現在も体の使い方やケアの方法等についてアドバイスを受けており、道場の先生と同様に競技を続ける上で欠かせない存在となっている。</li> <li>・現在は、週に2回、2時間から3時間程度練習をしている。道場の正規の練習は金曜日だけであるが、他の強化指定選手と比べて練習量が不足していることから、木曜日も練習日として指導をしてもらっている。</li> <li>・今年度から強化指定選手となったため、活動予定は流動的であるが、</li> </ul>

	<p>協会の強化合宿が2・3 か月に 1 度開催され、国内大会は年に 2 回、国際大会は今年度 3 大会ほど出場予定である。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・大会の出場に関しては職場の許可が得られているが、特段の支援はなく、仕事が忙しい中で、どうにか週 2 回の練習時間を確保している状況である。大会や合宿は有給休暇を取得して参加している。</li> <li>・今年度から強化指定選手として、合宿等で初めて実績のある選手たちと練習をともにし、たくさんの刺激を受けながら、「自分もこうなりたい」と感じておりモチベーションの向上につながっている。</li> <li>・アスリート雇用制度を活用して、競技に専念している強化指定選手がおり、自分も興味を持っているが、競技実績や残りの競技年数を考えると難しいのではないかと思う。完全なアスリート雇用ではないとしても、パラスポーツへの理解があり、練習時間の確保や支援をしてもらえるような企業や団体があれば、そういった所にアプローチしていくことも考えている。</li> </ul> <p>主な実施場所: 地元のテコンドー道場 重要な他者: 道場の先生、理学療法士</p>
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<ul style="list-style-type: none"> <li>・仕事に加えて、テコンドーの活動で家を空けることが多い中で、妻が家事を一手に引き受けてくれており、競技を続ける上でとても大きな支えとなっている。</li> <li>・強化合宿で他の強化指定選手と練習をともにし、道場での練習メニューとほぼ同様であるが、一つひとつのスキルが高く、参加するたびに刺激を受けている。</li> <li>・国際大会に出場した際に、他国の選手を見ていると、競技以外の場面でもとても楽しそうに過ごしていて、「本当に好きなことをやっているんだな」と感じさせられ、自分が競技を続ける上で刺激をもらっている。</li> </ul>
今後のスポーツ実施	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国内大会優勝、国際大会では入賞を目指していきたいと考えており、競技環境等の条件が整うようであれば、2024 年のパリパラリンピックを目指していきたい。</li> <li>・パラテコンドーの普及活動をしていきたいと考えている。地元であるM県で、若い選手たちや私と同じような上肢障害でこれからスポーツに取</li> </ul>

	<p>り組みたい方々と一緒に練習や体験をし、少しでも競技人口を増加させていきたい。</p>
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・パラテコンドーが東京 2020 パラリンピックの正式種目に入ったことを知り、自ら問い合わせで道場に入門した。</li> <li>・道場の先生にパラテコンドー選手の指導経験があり、スムーズに活動を始めることができた。</li> <li>・今年度から強化指定選手となり、練習頻度を増やしていきたいが、職場から十分な理解が得られず、活動時間の確保に苦慮している。</li> <li>・どこまで現役を続けられるかわからないが、条件が整うようであればパリパラリンピックを目指して競技を続けると同時に、競技の普及にも携わっていきたいと考えている。</li> </ul>

(河西正博)

仮名 22-K さん

インタビュー実施日時 2022年9月10日 13:00-15:00 場所 公共会議室

個人基本情報	<p>居住:関東地区 生年月日:1986年 性別:女性</p> <p>障害発生年齢:先天性 障害状況:先天性多発性関節拘縮症、1種2級</p>
略歴	<p>大学2年生からバドミントンを始め、2012年から2021年まで強化指定選手として国際大会等に出場。2018年に転職し、アスリート従業員枠として午前中は勤務、午後は練習を行っていた。東京2020パラリンピック後は、現役から退き、企業や市民を対象としたパラスポーツ等に関する講演会を行いつつ、バドミントンを継続している。</p>
競技基本情報	<p>競技:バドミントン クラス分け:車いす WH2</p> <p>主な戦績:2019年世界選手権女子シングルス、ダブルスメダリスト、東京2020パラリンピック競技大会シングルス入賞</p> <p>競技開始年齢:23歳</p>
障害発生から障害者スポーツ開始まで	<p>経緯:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・兄の影響で幼稚園の頃から体操教室に参加していた。通っていた幼稚園でも園長や先生が障害のない子どもたちと同じようにスポーツを含め何でも挑戦させてくれた。</li> <li>・小学校ではスイミング、ピアノ、そろばん、中学校では数学部、マンドリン部等で活動した。中学3年生で軽音楽部を立ち上げ、高校も継続して行っていた。中学、高校では運動部には所属していなかった。</li> <li>・高校1年生の時に医師から運動を勧められ、近くの障害者スポーツセンターに行き、水泳教室に参加した。それから高校を卒業するまで、バドミントンや卓球など様々な障害者スポーツを体験した。体験の際は、障がい者スポーツ指導員が相手になってくれた。センターには教室の他に様々なクラブがあり、バドミントンクラブにビジターとして参加していた。</li> <li>・大学2年生の時に、N 県で年に1回行われていた障害者バドミントン合宿に参加した。合宿に参加したことをきっかけにバドミントンを継続しようと思ったが、N 県に障害者バドミントンクラブがなかったため、自分で仲間を集めてクラブを創った。</li> </ul>

	<p>始めた場所:地元の障害者総合スポーツセンター</p> <p>重要な他者:</p> <p>① スポーツを始めたきっかけ:兄、医師</p> <p>② バドミントンを始めたきっかけ:車いすバドミントン K 氏</p>
障害者スポーツ開始に影響を受けた社会的状況・環境・条件	<p>・幼稚園から小学校は、兄が行うスポーツは自分もやってみたいと思い、兄と一緒に体操や水泳教室に通っていた。幼稚園長の理解があり、障害がある子どもでも、やりたいと思うことは何でも挑戦させてくれた。</p> <p>・高校に入り、足に痛みが出たことから病院へ行った。医師から運動を勧められ、障害者スポーツセンターへ行くこととなった。障害者スポーツセンターでは、様々な障害者スポーツを体験した。体験の際は、障がい者スポーツ指導員が相手をしてくれたり、サポートをしてくれたおかげで楽しくスポーツを継続することができた。</p> <p>・大学に入り、しばらくスポーツは行っていなかったが、バドミントン仲間から N 県内で障害者バドミントン合宿が行われていることを知り参加した。バドミントンを継続したいと考え、自らクラブを創り、車いすバドミントン仲間を増やすとともに、健常者と一緒にバドミントンを行った。</p>
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	<p>・先天性障害のため該当なし</p>
障害者スポーツ継続に関する状況	<p>継続状況:</p> <p>・健常者も障害者も楽しめるバドミントンクラブを自ら立ち上げ、健常者も参加していた地域のバドミントン大会に参加していた。</p> <p>・目標とする選手が身近にいたことで継続につながった。</p> <p>・2018年からは toto 助成を受け、消耗品やコーチ謝金、その他国際大会等の経費として使用した。</p> <p>主な実施場所:近隣の体育館、小中学校の体育館、県の障害者福祉センター、福祉・健康施設</p> <p>重要な他者:バドミントン仲間、地域のバドミントンコーチ、家族</p>
スポーツ継続	<p>・バドミントンが東京 2020 パラリンピックで正式競技に決定したことをき</p>

に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<p>っかけにパラリンピック出場を目標に練習に打ち込んだ。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・2018年に転職し、アスリート従業員枠として午前中は勤務、午後はコーチ付きで練習を行う環境があった。</li> </ul>
今後のスポーツ実施	<ul style="list-style-type: none"> <li>・企業や市民を対象としたパラスポーツ等に関する講演会を行っていく予定である。講演会では自分自身の経験、例えば、幼稚園長が障害に理解があり、何でも挑戦させてくれたことで今の自分があることなどを伝えたい。</li> <li>・バドミントンは今後も継続していきたい。</li> </ul>
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもの頃からスポーツを含め何にでも挑戦できる環境があったことは現在のスポーツ継続に大きく影響している。</li> <li>・障害者スポーツセンターの存在がパラスポーツを知り、体験するきっかけになった。</li> <li>・障害者スポーツセンターの職員と一緒にスポーツを行ってくれたことが運動の継続につながっている。</li> <li>・東京 2020 パラリンピック大会決定後、アスリート助成、アスリート雇用などの制度ができ、経済的な支援、練習環境などが整った。</li> <li>・今後は、バドミントンを継続しつつ、企業や市民を対象としたパラスポーツ等に関する講演会を行い、自身の体験等を伝えていきたいと考えている。</li> </ul>

(兒玉友)

## 50 人のパラアスリートのインタビュー調査から

藤田紀昭(日本福祉大学)

### はじめに

本調査プロジェクトでは 2019 年度からパラアスリートのスポーツキャリアに関するインタビュー調査を実施してきた。そして、今年度までに 50 名(男性 37 名、女性 13 名)の選手の話聞くことができた。調査年度ごとに調査の結果を報告しているが、今回は中間総括としてこれまでに明らかになったことを報告する。なお 50 名の障害種は、切断・欠損 17 名、脊髄・頸髄損傷等 14 名、その他の肢体不自由 10 名、視覚障害 7 名、脳性麻痺 2 名であった。障害程度は重度障害 30 名、中度障害 17 名、軽度障害 3 名であった。障害発生時期では先天的障害 16 名、後天的障害 34 名であった。

50 名のインタビュー調査からパラアスリートのスポーツへの社会化(どのようにしてスポーツをするに至ったか)および競技の継続に関して、以下の視点(条件)が重要であることが明らかになってきた。

1. スポーツを始める前の状況(スポーツに関心があるか否か)
2. 障害者スポーツに関する情報を得ている
3. 障害者スポーツの場へのファーストアクセスがある
4. 障害者スポーツを継続するための受け皿がある
5. 継続的な障害者スポーツの場へのアクセス方法が確保されている
6. 競技レベルに応じた社会的支援(家族、職場などの支援)、経済的支援(海外遠征、合宿、用具の購入など)がある
7. 何らかの形(ロールモデルの存在、指導者、ライバルの存在、パラリンピックなどの大会、目標となる記録や成績など)で競技に対するモチベーションが維持されている

インタビューに答えていただいた選手の皆さんはいずれもこうした視点(条件)がクリアされている。逆に言えば、これらの視点(条件)が整っていなければ、障害のある人がスポーツにアクセスし、継続することが難しいと言えるのではないだろうか。

そこで、この中間総括ではこれらの 7 つの視点(条件)について、障害種類と障害発生時期(先天的障害、後天的障害)などの側面から特徴を確認していく。



## 1. スポーツを始める前の状況(スポーツに関心があるか否か)

第1の視点(条件)は障害のある人がスポーツを始める前の前提条件と言える。これについては、5名(20-G、22-C、22-E、22-G、22-I)および不明の1名(21-K)を除く44名がスポーツに関心や興味があったとみることができる。障害のある人がスポーツを実施するためにはまず、スポーツに関心があることが条件と言える。スポーツに関心がなければ次の視点(条件)である障害者スポーツに関する情報を探そうとしないであろうし、情報がもたらされたとしてもスポーツへ気持ちが向くこともないと考えられる。また、後天的障害者で受傷前にスポーツに全く関心がなかった人やスポーツ嫌いだった人が受傷後スポーツにすぐに関心を持つことは難しいと考えられる。

関心がなかった5名全員が重度障害であり、うち4名(20-G、22-E、22-G、22-I)は先天的障害であった。22-Gや22-Iは日常生活で介助を要する脳性麻痺の重度障害であり、おそらく幼少期のスポーツ経験が乏しかったと考えられる。そのことがスポーツへの関心が持てていなかった要因ではないかと推察される。

こうした状況を勘案すると、障害者スポーツの普及を図るための第1の条件として、障害の有無に関係なく多くの子どもたちにスポーツを様々な形で体験させ、好きになってもらうことが必要だと考えられる。そのことで途中で障害を持ったとしてもスポーツに関心を持ってくれるであろうし、先天的に障害があったとしてもスポーツすることが可能であることを知る人が増え、障害者のスポーツ普及に結びつくと考えられる。

## 2. 障害者スポーツに関する情報を得ている

第2の視点(条件)は障害者スポーツに関する情報を必ず得ているということである。情報を自ら主体的に探し求めた人もいれば、何らかの機会に他人やメディアから情報を得たという人もおり、情報源は多様である。多様ではあるが、脊髄損傷・頸髄損傷等の人と切断・欠損の人は医療関係者から得ていることが多い。脊髄損傷・頸髄損傷等では17名中5名、切断・欠損では17名中8名であった。

脊髄損傷・頸髄損傷等の人の場合は5名(19-A、19-C、20-C、20-J、21-C)ともリハビリテーションセンター(療育センターを含む)におけるリハビリ時に情報を得ていた。5名の障害発生時期は1973年～2004年で、医療保険によるリハビリテーションが長く受けられる時期であったと推測される。十分なりハビリテーションの最後にスポーツへの導入が図られ、スポーツへと導かれたものと考えられる。ゆえに次の視点(条件)である「障害者スポーツの場へのファーストアクセス」もスムーズに行われたことが推察できる。

切断・欠損の人の情報源の内訳は医師4名(19-H、21-B、21-D、22-B)、義肢装具士3

名(19-B、20-B、21-E)、理学療法士1名(21-H)であった。医師が障害者スポーツについて情報を持っている場合、切断後のスポーツ活動を想定して、切断部位を考えるなど、その後のスポーツ活動に大きな影響を及ぼすことが考えられる。また情報提供者が医師の場合も義肢装具士につながるものが一般的で、切断・欠損の障害の場合、義肢装具士がスポーツへの導きに大きな影響を与えていることも推察される。

脊髄損傷・頸髄損傷等の人では同じ障害のあるパラスポーツ選手から情報がもたらされている人が3名(20-M、21-A、21-K)いた。自分の足での歩行から車いすによる移動へと日常生活方法が大きく変わる中で、同様の障害を持つ人がもたらす情報はより現実的なものであったのではないかと思われる。

先天的障害と後天的障害では前者において家族・親族や教育関係者からの情報提供、後者において医療関係者からの情報提供が目立った。

また、視覚障害者柔道3名(20-K、21-L、22-A)に関しては2名(20-K、21-L)は障害発生前から柔道をしていた。1名(22-A)は先天的障害で特別支援学校高等部から柔道を始めており、後天的に視覚障害となったのちに柔道を始めた人はみられなかった。なお、先天的障害の1名は「柔道の投げ」を「やり投げのように人を投げる」とこととイメージしていたようで、体育の授業で柔道を体験して初めて「柔道の投げ」の内容を知り、柔道のイメージが変わり、競技を始めたということであった。

### 3. 障害者スポーツの場へのファーストアクセスがある

第3の視点(条件)は障害者スポーツの場へのファーストアクセスがなされていることである。障害者のスポーツへの社会化では情報が当該者に届いただけではスポーツ活動に結びつかない場合がある。障害者スポーツに関する情報があっても、どこに行けば活動できるのか、どのようにアクセスすればいいのかがわかり、そのアクセス方法が確保されなくてはスポーツの場には行けないからである。また、人によってはスポーツの場へアクセスすることに対する心理的な壁が高く、現場になかなか足が向かないことがあるかもしれない。「知り合いが練習の場にいたから自分も気楽に練習に行くことができた」(22-I)という発言からもそのことがうかがえる。障害の内容や程度、年齢によっては自分でアクセスができないため家族等に頼らなくてはならない場合もある(19-D、19-E、21-F、22-B、22-D、22-G、22-I)。場合によってはスポーツの場へのファーストアクセスを情報提供者やその関係者が支援してくれる場合や先述のようにリハビリテーションの各現場でファーストアクセスが可能な場合もある(19-A、19-B、19-C、21-C)。

ファーストアクセスで多くの人はそのスポーツを体験し、面白さを知り、あるいはそこにいる

人に勧められたりして継続的なスポーツ活動につながる。まさに「はじめの第一歩」は非常に重要なのである。

なお、先天的障害と後天的障害では前者において家族・親族によるファーストアクセス、後者においては自分から動いてファーストアクセスを行った人が目立った。

#### 4. 障害者スポーツを継続するための受け皿がある

4 つ目の視点(条件)は障害者スポーツを継続するための受け皿があるということである。今回インタビューをさせていただいた選手には全員スポーツ継続のための受け皿があった。多くの場合は当該競技のクラブやチームであった。スノーボードで日常的には個人的にゲレンデで練習している人(21-M)や自分で受け皿(チーム)を作った人(21-I、22-K)もいたが、いずれにしても継続的なスポーツ活動の場があった。中にはスポーツ活動の場をいくつか持っており、多くの日を練習に費やしている人もいた(19-F、20-H、20-L、21-F、21-P、22-B、22-H)。

スポーツ実施の受け皿がないことが障害のある人のスポーツ活動の妨げになっていることがある。希望する競技のチームやクラブがなかったり、諸事情で体育館を使わせてもらえなかったり、近くに利用可能なスポーツ施設がなかったり、あるいは次の視点(条件)で述べるスポーツの場へのアクセスが難しい場合なども受け皿がないことの要因となる。

#### 5. 継続的な障害者スポーツの場へのアクセス方法が確保されている

5 つ目の視点(条件)は継続的な障害者スポーツの場へのアクセス方法の確保である。スポーツ活動を継続するためにはスポーツの場へのアクセス方法が確保されていなくてはならない。多くの場合は、自分で車を運転したり、公共交通機関を利用したりしてスポーツの場へアクセスしているが、スポーツの場へのファーストアクセスと同様に、障害の内容や程度、年齢によっては自分でアクセスができないため家族等に頼らなくてはならない場合がある。頸髄損傷や脳性まひ、筋ジストロフィーなど重度の肢体不自由者の場合、公的な移動支援制度が自治体によってはあるものの、利用目的や回数に制限があるためスポーツの場へのアクセスを家族等が支援している場合がある(19-A、21-A、22-G、22-I)。18歳未満では運転免許が取得できず、家族も仕事の関係で支援が難しい場合、スポーツ活動が著しく制限され、運転免許取得後に本格的にスポーツを始めるといった例もある(22-D)。

#### 6. 競技レベルに応じた社会的支援(家族、職場などの支援)、経済的支援(海外遠征、合宿、用具の購入など)がある

6 つ目の視点(条件)は競技レベルに応じた社会的支援や経済的支援が受けられていることである。50 名中 17 名は選手雇用されており、競技に専念できる環境であった。そのうち、14 名は国際大会入賞のレベルである。残り 3 名も国際大会経験者である。スポーツ継続の重要な他者として、スポンサーを挙げた人も 2 名(21-D、21-G)いた。パラリンピックに出場するためには世界ランキング上位にいたり国際大会予選を勝ち抜く必要があり、海外遠征や日本代表合宿を頻繁に行う必要がある。一般雇用の選手は 24 名、国際大会入賞レベルの選手は 12 名であった。この中には一般雇用でありながら選手雇用とほぼ同じ条件で勤務している選手(19-F)、調査時は一般雇用であったがかつては選手雇用であった選手(22-K)もいた。一般雇用の選手の場合、海外遠征などは有給休暇や特別休暇を取得し、平時に人並み以上に働き、職場の理解を得て職場を抜けるような努力をしていた(21-M、21-L)。

既婚者の場合、スポーツを続けることに対する理解や家族からの精神的な支援やスポーツにお金を使うことへの理解や練習や試合時の移動支援を得ている場合が多い(19-A、19-F、19-H、20-C、20-J、21-C、21-I、21-M、21-N)。未婚の場合は父母から同様の支援を受けていることが多い(21-A、22-I)。

## 7. 何らかの形(ロールモデルの存在、指導者、ライバルの存在、パラリンピックなどの大会、目標となる記録や成績など)で競技に対するモチベーションが維持されている

最後の視点(条件)はモチベーションの維持である。スポーツを継続的に実施するためにはそのためのモチベーションが維持されなくてはならない。今回インタビューをした 50 名は様々な形でモチベーションを維持していると考えられる。インタビュー調査ではスポーツを継続することにおいて重要な人物はだれかを尋ねている。また、スポーツ継続のロールモデルとなる人を挙げる人もいた。さらに、今後の目標などについて尋ねた。これらの結果から、目標となる人物の存在、指導者、目標とする大会、チームメイトの存在を挙げる人が多かった。6 番目の視点(条件)と明確に分けることは難しいが、各選手が何らかの支援や目標を動機づけとしていることが明らかになった。

## おわりに

今回 50 名の選手のインタビュー調査結果の中間報告を行った。それぞれがスポーツをやるようになるまでの経緯は一言でいうと「多様」である。その中からある程度共通する部分を今回切り出した形である。データをどう解釈するかは非常に難しいものがある。また、インタ

ビューアーによって聞き逃してしまったことなどもあり、調査結果として十分でないところもある。さらに、インタビュー調査は調査のアレンジから報告、まとめまで非常に時間がかかるが、アンケート調査ではみえない選手の実像がみえてくる点が魅力的である。

今回挙げた 7 つの視点(条件)はほぼ 50 人に共通するものであったと思われる。裏返せば、こうした条件がない障害者はスポーツを継続するのが難しいということである。また、大きな気づきとして今回インタビューした人たちのほとんどはスポーツに関心がある人たちだということがある。障害発生時期にかかわらず、子どもの時からスポーツに接することができ、スポーツで楽しい、あるいはよい経験をした人が、障害がありながらもスポーツを実施する可能性が高いということである。それゆえ、障害者のスポーツ普及には障害の有無にかかわらず子どもの時から豊かなスポーツ経験ができる環境づくり、プログラム作り、体育授業が非常に重要だと言える。

50 名という大人数のインタビューから得られた結果であるが、インタビュー対象者の性別や、障害種、競技等に偏りがみられる。今後は偏りが少なくなるようさらにインタビュー調査を進めていきたい。最後に、インタビュー調査に快く応じていただいた選手の皆さんに心より感謝申し上げたい。ありがとうございました。

■図表 1-2 2019～2022 年のキャリア調査インタビュー一覧

判別記号	性別	生年	障害名	障害程度	受障後最初の競技	現在の主競技	先天・後天	競技レベル	スポーツへの関心	情報源
19-A	男	1967	脊損・頸損等	重度	ツインバスケ	水泳	後天	国際出場	有	医療関係者
19-B	男	1978	切断・欠損	中度	陸上	陸上	後天	国際出場	有	医療関係者
19-C	男	1956	脊損・頸損等	重度	車いすバスケ	パラホッケー	後天	国際入賞	有	医療関係者
19-D	男	1996	その他の肢体	重度	卓球	卓球	先天	国際入賞	有	家族・親族
19-E	男	1976	脊損・頸損等	重度	水泳	陸上	先天	全国入賞	有	家族・親族
19-F	男	1976	脊損・頸損等	重度	車いすバスケ	車いすフェンシング	後天	国際入賞	有	家族・親族
19-G	男	1969	その他の肢体	軽度	アーチェリー	アーチェリー	後天	国際入賞	有	その他
19-H	男	1969	切断・欠損	中度	その他	射撃	後天	国際出場	有	医療関係者
19-I	男	1971	脊損・頸損等	重度	水泳	水泳	後天	国際入賞	有	スポーツ関係者
20-A	女	1981	切断・欠損	中度	水泳	トライアスロン	後天	国際入賞	有	その他
20-B	女	1975	切断・欠損	重度	スキー	スキー	先天	国際入賞	有	医療関係者
20-C	男	1973	脊損・頸損等	重度	アーチェリー	アーチェリー	先天	国際入賞	有	医療関係者
20-D	男	1983	脊損・頸損等	中度	卓球	卓球	先天	国際入賞	有	その他
20-E	男	1967	その他の肢体	重度	車いすテニス	車いすテニス	後天	国際入賞	有	福祉関係者
20-F	男	1970	その他の肢体	中度	水泳	水泳	後天	全国入賞	有	スポーツ関係者
20-G	男	1993	CP	重度	車いすバスケ	陸上	先天	全国入賞	無	教育関係者
20-H	男	1990	切断・欠損	中度	車いすバスケ	車いすバスケ	後天	国際入賞	有	メディア
20-I	女	1997	切断・欠損	中度	車いすバスケ	車いすバスケ	後天	国際出場	有	スポーツ関係者
20-J	男	1955	脊損・頸損等	重度	車いすバスケ	車いすテニス	後天	国際出場	有	医療関係者
20-K	男	1980	視覚	重度	柔道	柔道	後天	国際入賞	有	家族・親族
20-L	男	1988	切断・欠損	軽度	その他	パラバドミントン	先天	国際入賞	有	教育関係者
20-M	男	1977	脊損・頸損等	重度	陸上	陸上	後天	全国出場	有	パラスポーツ選手
21-A	男	1990	脊損・頸損等	重度	ポッチャ	ポッチャ	後天	全国入賞	有	パラスポーツ選手
21-B	男	1982	切断・欠損	中度	スノボ	陸上	後天	国際入賞	有	医療関係者
21-C	男	1985	脊損・頸損等	重度	ツインバスケ	車いすラグビー	後天	国際入賞	有	医療関係者
21-D	男	1980	切断・欠損	中度	陸上	陸上	後天	国際入賞	有	医療関係者
21-E	男	1991	切断・欠損	中度	陸上	陸上	後天	国際入賞	有	医療関係者
21-F	男	1979	脊損・頸損等	重度	車いすバスケ	車いすバスケ	先天	国際入賞	有	家族・親族
21-G	女	1998	切断・欠損	中度	陸上	陸上	後天	国際入賞	有	パラスポーツ選手
21-H	男	1990	切断・欠損	中度	陸上	陸上	後天	国際入賞	有	医療関係者
21-I	男	1966	視覚	重度	柔道	陸上	後天	国際入賞	有	その他のパラスポーツ関係者
21-J	男	1959	切断・欠損	重度	アーチェリー	アーチェリー	後天	全国出場	有	メディア
21-K	女	1961	脊損・頸損等	重度	パラバドミントン	パラバドミントン	先天	国際入賞	不明	パラスポーツ選手
21-L	男	1976	視覚	重度	柔道	柔道	後天	国際入賞	有	
21-M	男	1981	その他の肢体	軽度	スノボ	スノボ	後天	国際入賞	有	メディア
21-N	男	1981	切断・欠損	中度	スノボ	スノボ	後天	国際入賞	有	メディア
21-O	男	1980	切断・欠損	重度	スノボ	スノボ	後天	国際入賞	有	その他
21-P	女	1985	視覚	重度	水泳	水泳	先天	国際入賞	有	その他
21-Q	女	1982	その他の肢体	中度	シッティングバレーボール	シッティングバレーボール	後天	国際入賞	有	メディア
22-A	女	1990	視覚	重度	柔道	柔道	先天	国際入賞	有	教育関係者
22-B	女	1991	切断・欠損	中度	陸上	陸上	後天	全国入賞	有	医療関係者
22-C	女	1962	視覚	重度	STT	STT	後天	全国出場	無	福祉関係者
22-D	男	1972	切断・欠損	中度	車いすバスケ	車いすテニス	後天	国際入賞	有	家族・親族
22-E	女	1977	その他の肢体	重度	車いすテニス	水泳	先天	全国出場	無	その他のパラスポーツ関係者
22-F	男	1979	脊損・頸損等	重度	卓球	卓球	後天	全国入賞	有	
22-G	女	1997	CP	重度	ポッチャ	ポッチャ	先天	国際入賞	無	医療関係者
22-H	男	1990	視覚	重度	その他	ゴールボール	後天	国際出場	有	教育関係者
22-I	男	1999	その他の肢体	重度	ポッチャ	ポッチャ	先天	国際入賞	無	福祉関係者
22-J	男	1982	その他の肢体	中度	パラテコンドー	パラテコンドー	先天	国際入賞	有	メディア
22-K	女	1986	その他の肢体	重度	水泳	パラバドミントン	先天	国際入賞	有	その他のパラスポーツ関係者

判別記号	受け皿	アクセス方法	ロールモデル	開始時 重要な他者	継続時 重要な他者
19-A	有	他者が車を運転	無	医療関係者	家族・親族
19-B	有	自分で車を運転	有	医療関係者	バラスポーツ選手
19-C	有	自分で車を運転		医療関係者	バラスポーツ選手
19-D	有		有	家族・親族	家族・親族
19-E	有	自分で車を運転	無	その他	バラスポーツ選手
19-F	有			家族・親族	家族・親族
19-G	有			その他	家族・親族
19-H	有			医療関係者	家族・親族
19-I	有			スポーツ関係者	スポーツ関係者
20-A	有		有	バラスポーツ指導者等	バラスポーツ指導者等
20-B	有		有	医療関係者	バラスポーツ指導者等
20-C	有	自分で車を運転		バラスポーツ選手	家族・親族
20-D	有	その他	有	教育関係者	家族・親族
20-E	有	自分で車を運転		バラスポーツ選手	バラスポーツ選手
20-F	有			バラスポーツ指導者等	バラスポーツ選手
20-G	有	その他	有	教育関係者	バラスポーツ指導者等
20-H	有	自分で車を運転		メディア	バラスポーツ選手
20-I	有		有	スポーツ関係者	バラスポーツ選手
20-J	有		有	医療関係者	家族・親族
20-K	有		有	家族・親族	バラスポーツ選手
20-L	有		有	バラスポーツ指導者等	バラスポーツ指導者等
20-M	有			バラスポーツ選手	バラスポーツ選手
21-A	有	他者が車を運転		バラスポーツ選手	家族・親族
21-B	有	自分で車を運転		医療関係者	スポーツ関係者
21-C	有			医療関係者	家族・親族
21-D	有			医療関係者	その他
21-E	有	その他		医療関係者	バラスポーツ選手
21-F	有		有	家族・親族	バラスポーツ選手
21-G	有		有	医療関係者	その他
21-H	有		有	医療関係者	バラスポーツ選手
21-I	有	公共交通（介助なし）		スポーツ関係者	家族・親族
21-J	有			医療関係者	その他
21-K	有			バラスポーツ選手	スポーツ関係者
21-L	有			教育関係者	バラスポーツ選手
21-M	有	自分で車を運転	有	バラスポーツ選手	家族・親族
21-N	有			バラスポーツ選手	家族・親族
21-O	有		有	家族・親族	バラスポーツ選手
21-P	有			その他	バラスポーツ指導者等
21-Q	有			バラスポーツ指導者等	バラスポーツ指導者等
22-A	有			教育関係者	スポーツ関係者
22-B	有	自分で車を運転	有	バラスポーツ選手	バラスポーツ選手
22-C	有			バラスポーツ指導者等	
22-D	有	自分で車を運転		家族・親族	バラスポーツ指導者等
22-E	有	自分で車を運転		その他のバラスポーツ関係者	バラスポーツ指導者等
22-F			有	教育関係者	バラスポーツ選手
22-G	有	他者が車を運転	有	バラスポーツ選手	バラスポーツ指導者等
22-H	有	公共交通（介助なし）		教育関係者	教育関係者
22-I	有	他者が車を運転		バラスポーツ選手	家族・親族
22-J	有		有	スポーツ関係者	スポーツ関係者
22-K	有		有	家族・親族	バラスポーツ選手

